プロテスタント主義なり、若し教會に依るの必要あらん乎、我儕は復たび羅馬天主教會に還るべきなり、蓋其組織の完全にして其系統の確實なる、此舊教會に優るものゝ他に存せざればなり、然れどもルーテル一たび信仰の自由を唱へてより地上の教會は不必要物と成れり、我儕プロテスタント主義者は信仰養成のために教會を利用することあるべし、然れども其指導を受くるにあらざれば我儕の救濟を全うする能はずと信ずるが如きは我儕本來の主義にあらず、我儕は忠實なるプロテスタント主義者として飽くまで教會の主權に反對す。(三七、七)

信仰の獨立 我儕は我儕に賦與せられし自由を濫用せざらんことを努むべし、然れども自由の濫用を懼れて我儕は之を他人何者の手にも委ねざるべし、我儕の自由を監視する者は唯一なり、即ち天に在す我儕の父なり、彼の之を監視し給ふありて、我儕に人なる監督の要あるなし、自治は神護の意なり、神護の厚きを信ずる者は獨り立て恐れざるなり。(三七、七)

我儕の充實 或者は車を恃み、或者は馬を恃む、或者は學問を恃み或者は多數を恃む、然れども我は我エホバの神を恃まん(詩篇二十篇七節)我れ神と偕にありて我れ一人は全世界よりも大なり、我は殊更に孤立を愛せず、然れども單獨を懼れて强ひて同志を天下に求めず、我は我神に於て我要する萬物を有す。(三八、一)

磐に賴らん 情の海あり、眞理の陸あり、而て海は常に動搖して陸は常に靜かなり、人は海なり、神は陸なり、然り、磐なり、我等もし人と共に動かざらんと欲せば**我よりも高き磐に賴らざるべからず**。(三八、一)

獨立教會の建設 監督に由て建てられし教會あり、宣教師に由て建てられし教會あり、然れども我儕は神の聖書を學んで神に由て我儕の教會を建てんと欲す、聖書は獨逸にルーテル教會を生めり、同じ能力ある聖書は又日本に純なる日本教會を生まざらんや、我儕は人の手を

借らずして强固なる獨立教會を建て得るなり。（三八、一）

彼我の優劣　我儕の軍人は我等の武力に於て歐米人に劣る所なきを證明せり、我儕の宗教家も亦我等の信念に於て歐米人に何の劣る所なきを確信す、彼等の知る所は我等も知る、然り彼等の知らざる所は我儕に示されたり、我儕は我儕の基督教に於て歐米の宗教家に依賴するの要なし。（三八、一）

今猶ほ隷屬の民たり　武を以て勝つも若し靈を以て勝つに非ざれば我等は今猶ほ隷屬の民たり、若し我儕の信仰にして獨立せずんば我儕の獨立は今猶ほ虛僞の獨立なり、誰か歐米人を戴いて我陸海軍の將校たらしむるものあらんや、然れども我儕は我儕の靈魂を彼等歐米人の指導の下に置くにあらずや、耻ぢよ、日本國多數の基督信徒よ、汝等は未だ自立の民にあらざるなり。（三八、一）

獸力崇拜の民　我儕を侮蔑せしものは露西亞人に限らず、歐米人皆悉く然り、彼等の軍人然り、政治家然り、美術家然り、宗教家然り、宣教師然り、然るに今や彼等我儕の武力に於て彼等に劣る所なきを見るや、我儕を凡ての材能に於て賞讃してやまず、憫むべし、彼等歐米人は獸力崇拜の民たるを失はず、我儕靈に於て强からんと欲するもの、豈彼等を我儕の信仰の師父として仰がんや。（三八、一）

雜誌記者の覺悟　今我れ人の親みを得んことを要むるや、神の親みを得んことを要むるや、或は人の心を得んことを求ふやもし我れ人の心を得んことを求はゞキリストの僕にあらざるなり（加拉太書一章十節）發兌部數の多きを競ふ今の時に方ては余輩雜誌記者にも亦使徒保羅の此覺悟なかるべからず。（三八、二）

神政の特質　基督教は王政にあらず、故に王侯貴族に依らず、基督教は共和政治にあらず、故に多數を賴まず、基督教は神政なり、故に無形の神に信賴す、基督教は眞個の獨立を奬勵す、即ち獨り神と偕に全世界

を相手として起つ底の人物を造る。（三八、四）

依賴と嫉妬　依賴する者は互に相妬む、是れ必然の理なり、宗教家に嫉妬心強きは彼等の依賴心強きに因る、彼等にして若し悉く獨立の人ならん乎、彼等も亦同輩相援くるの人となりて、寛容高氣の模範を世に示すに至らん、依賴は嫉妬を釀してキリストの教會を破壞す、恐るべきは異端に非ずして依賴心なり、而かも異端を恐るゝ者は多くして依賴を恐るゝ者は尠し、奇異と謂つべし。（三八、八）

同盟の危險　露人を信ずべからざるのみならず、英人をも信ずべからず、佛人を信ずべからざるのみならず、米人をも信ずべからず、歐人も米人も皆齊しく利慾の人にして罪の子なり、彼等の一に賴るは他の者に賴るが如く危し、詩人ダンテ曰く、余は余一人にて一黨派を樹立せんと、吾人は神と結ぶべし、人と同盟すべからず、神我と偕にありて我は惟り全世界と相對して立つを得べし。（三八、八）

寂寥の快樂　寂寥は人を離れ獨り神を求むることなり、無邊の宇宙に在て神と我と二者相對して立つことなり、此時我に國家あるなし、社會あるなし、友人あるなし、家族あるなし、我に唯我と天然と神とあるのみ、我は人の聲を聞かず、其歡呼の叫びは僅かに遠雷の如くに我が耳に達するのみ、**我れ獨りあるに非ず、我父と共に在れば**なり（約翰傳八章十六節）、人我より遠かる時に神我に近し、我獨り立つ時に神は我が力なり、秋風蕭殺、寂寥の念更らに甚だしき時に我に人の知らざる快樂あり。（三八、一一）

孤立の種類　孤立に二種あり、人を離れて獨り立つ孤立、是れ其一なり、人を離れて神と偕に立つ孤立、是れ其二なり、人を離るゝの點に於ては二者其趣きを一にす、然れども神と偕に在ると在らざるとの點に於ては二者全く其根柢を異にす、獨り立つ孤立は傲慢の孤立なり、神と偕に立つ孤立は謙遜の孤立なり、前者は俗人、不平家、絶望家の孤立なり、

後者は神に惠まれし基督信者の孤立なり、二者の間に天地の別あり。（三八、一一）

詩人と俗人　詩人、地主に言ふて曰く、「土地は汝の所有なり、然れども風景は我が所有なり」と、神の天然を樂むに山林田野を我が有となすの要なきなり。

詩人、政治家に言ふて曰く、「政權は汝に在り、教權は我に存す」と、人の心を支配するに軍隊、警察、法律、威力に依るの要なきなり。

詩人、宗教家に言ふて曰く、「寺院と教會とは汝に屬す、然れども靈魂は我に歸す」と、人に神の愛を示し、救拯の恩惠を傳へ、聖靈の歡喜を供するに僧侶、神官、監督、牧師、傳道師たるの要なきなり。（三九、四）

軟弱信者に告ぐ　基督教を究めよ、基督教に就て聞かんと欲する勿れ、聖書を學べよ、宗教文學を樂まんと欲する勿れ、神を信ぜよ、教會と教師とに賴らんと欲する勿れ、己の弱きを訴ふるを止めて自ら强からんことを求めよ、何時までも信仰の乳を以て養はれんと欲する信仰の赤子たる勿れ、堅きに耐え、神の信賴に値する福音の戰士たれ。（三九、六）

荏弱の自覺　弱し弱しと歎じ、他人の援助をのみ維れ求むる者多し、然れども自己の弱きを覺るは是れ他人の援助を仰がんためにあらず、直に神に到りて自己を强くせられて獨り自から立たんためなり、荏弱の自覺は信仰の確立に終らざるべからず、徒らに悲鳴を擧げて世の同情推察を哀求するが如きはクリスチャンたるの道に非ず。（三九、七）

內外の自由　外の自由は之を求めんと欲する勿れ、內の自由を求めんと欲せよ、肉は縛らるゝも可なり、靈にして神の宿る所となれば足る、神は必しも其愛子に外の自由を與へ給はず、然れども內に罪の羈絆を解て、彼をして鏈に繫がれながら歡喜に溢れて神を讃美せしめ給ふ。

使徒行傳十六章廿四、廿五節。（三九、九）

單獨の歡喜　獨り足りて獨り喜び、獨り喜びて到る處に歡喜の香

を放つ、星の如く、花の如く、識認を要せず、奬勵を要せず、獨り輝いて獨り香はし、詩人ホイットマン曰く

我は我が有る儘に存在す、夫れにて足る、

若し世に何人の我を認むるなきも我は滿足して獨り座す、

若し衆人と各人とが我を認むるとも我は滿足して獨り座す、

と、而してキリストに在りて我も亦斯く在り得るを感謝す。（四〇、一）

一人となりて立つの覺悟　我等キリストの僕となりて一人となりて世に立つの決心なかるべからず、世は我等の主を棄たり、亦其僕たる我等をも棄つべし、此世の政府と社會と教會と個人とは我等の主を棄しが如く亦我等をも棄つべし、我等にも亦獨り十字架に上るの決心なかるべからず、我等の友人と親戚と弟子とに棄てられ、獨りエリ、エリ、ラマ、サバクタニを口にしながら氣絶るの決心なかるべからず。

馬太傳廿七章四十六節。（四〇、二）

神の忠僕　我は我がものに非ず、我が家族のものに非ず、我が親戚のものに非ず、我は神のものなり、故に神の聖旨を遂ぐるに方ては血肉と謀るの要なき者なり、人に對しては絶對的獨立者たるにあらざれば我は神の忠實なる僕たる能はず。（四〇、五）

教會と自由　曰く天が下に基督教會と稱すべき者はただ三箇あるのみ、三箇以上あるなし、曰く羅馬天主教會、曰く露國希臘教會、曰く英國監督教會是れなり、三者共に系統を聖使徒より引く者、故に正教會なりと。

或ひは然らん、然らば余輩の如きは聖使徒に何の關係なき者、故に小羊の群に屬せざる者、靈界の山羊、終に外の幽暗に追出されて、哀哭切齒する者ならん。

然れども何を恨みん、パウロ何人ぞ、ペテロ何人ぞ、パウロ自身の言に依るも彼等は我等をして信ぜしめんとて勸むる者なるの外なし、余輩は

系統を聖使徒より引かざればとて悲まず、余輩は直にキリストに行はばなり、逝けよ、正教會、退けよ、聖使徒、聖子の自由を余輩に賜へり而して聖使徒なりと雖も此自由を余輩より奪ふ能はざるなり。哥林多前書三章五節。約翰傳八章二十六節。（四一、六）

眞理と獨立

眞理は自己を支持すと云ふ(Truth supports itself)故に眞理は自づから獨立なり、之に反して虛僞は自己を支持する能はず、故に自づから依頼するなり、獨立は眞理を證し、依頼は虛僞を證す、事物の眞僞を驗す標準にして之に優りて確實なるはなし。

夫の外國宣教師に依て傳へられし基督教なる者を見よ、其歸依者は教會と宣教師とに依頼せずして一雜誌を起す能はず、一教會を建つる能はず、而かも彼等は眞理を傳ふると稱す、然れども彼等の依頼は彼等の傳ふる眞理の眞理ならざるを證す、彼等は意力の缺乏を歎くを要せず、そは彼等と雖も若し眞理を受けしならば、獨り立て道を傳ふるを得べ

ければなり、人をして獨立ならしめざる宣教師の基督教は眞の基督教にあらざるを自證して餘りあり。（四一、六）

國家の危殆

不信の世は「人物」、「人物」と絶叫して人物を要求して止まず、然れども知らずや神に還りて人は皆な悉く「人物」なることを、人に依らずして神に頼むで國家の指導を能く小兒に委ぬるを得べし、イザヤは未來のキリストの國に就て豫言して曰く

狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に臥し、犢雄獅、肥えたる家畜と共に居りて小さき童子に導かれん（以賽亞書十一章六節）

と、人物に指導さるゝにあらざれば立つ能はざる國家と社會とは危いかな。（四一、八）

傳道の妨害

傳道の妨害は異端に非ず、無教會主義に非ず、傳道の妨害は負債なり、束縛なり、人に對する遠慮なり、是れありて如何なる純福音を說く者と雖も人を其心の根柢に於て救ふ能はざるなり、自由は

傳道第一の要件なり、是れあらん乎、多少の異端は意とするに足らず、是れ無からん乎、正教も聖職も以て人を有力なる傳道者と爲すに足らず、惡魔は債鬼なり、彼を驅逐してのみ吾人は能く靈界の勇士と成るを得るなり。(四一、一〇)

惡しき口癖 弱し弱しと口癖に言ふ、然り、我等は神に對して弱きなり、人に對して弱きに非ず、我等は人に對しては強きなり、我等は人の面を懼れざるなり、我等は人の交際を求めざるなり、我等は人の贊成を得て事を爲さんと欲せざる也、我等は人に對しては預言エレミヤと同じく堅き城、鐵の柱、銅の垣たらんと欲するなり、言ふを休めよ、弱し弱しと。耶利米亞記一章十八節(四一、一一)

人を援くるの途 人を援けよ、然れども援けて彼を懦弱たらしむる勿れ、彼の獨立を援けよ、彼の自由を援けよ、徒らに彼の負へる重荷を取去らんとする勿れ、神が吾人を援くるが如くに人を援けよ、即ち彼を

して安樂ならしめんが爲めに非ずして、彼の意志を强めんがために援けよ、深遠に親切なれ、時には彼に不仁、不情の故を以て怨まるゝ程度に於て親切なれ。(四一、一二)

我の祈願 我は詩人たるべし、神學者たらざるべし、我は預言者たるべし、祭司たらざるべし、我は勞働者たるべし、所謂敎役者たらざるべし、我は自由の人たるべし、規則の人たらざるべし、我は自己と自己の裏に宿り給ふ神の外に我が權能を求めざるべし、我は神と共に獨り世に立つべし、人と其定めし制度に據らざるべし、我は神に使はるべし、人に又人を通うして使はれざるべし、我は元始の人の如くなるべし、即ち神の友となりて彼と偕に歩むべし、我は神の恩惠に由り斯く爲し又斯く成らんと欲す。(四二、三)

鳥と人 雀は群を爲して地に餌を拾ひ、相共に啁り相共に語る、然れども日を指して登る雲雀は獨り歌ひ、晴空に翔ける鶯は獨り飛ぶと、若

し然らんには集會を愛する輩は雀族なり、義の太陽を指して登らんと欲する者は單獨を免がるゝ能はず、大著作の未だ曾て委員の手に由て成りし者あるを聞かず、大信仰の未だ曾て信徒の會合に由て起りし例あるを知らず、強く神の光輝に觸れんと欲する人は雲雀と鶯とに就て學ばざるべからず。英國婦人某の慰藉の書翰に由る。(四二、三)

滿全の幸福

政府に賴り、教會に賴り、貴顯に賴り、宣教師に賴り、名士に賴り、先輩に賴り、弟子に賴り、兄弟に賴りて幸福あるなし、不幸あるのみ、名譽あるなし、恥辱あるのみ、成功あるなし、失敗あるのみ、神と自己とにのみ賴りて無上の幸福あり、無窮の榮光あり、永遠の成功あり、幸福に達するの途、他にあるなし、人を離れて神に賴るにあり、他を去て自己に歸るにあり、瑕なき曇なき滿全の幸福は神に賴る獨立の生涯にあり。(四二、三)

谷の百合花

純信徒の團體あり、人は其所在を知らず、余輩も亦之を人に告げず、彼等に蹂躙られんとを恐れてなり、然れどもその實在するは確かなり、或ひは空谷に在り、或ひは草木に隱る、教則と教職とを識らず、教義と儀式とあるなし、峯の櫻の如き者、谷の百合花に類したる者世の教會に於て見る能はざる純信徒なり。

エルサレムの女子等よ、我れ汝等に誓ひて請ふ、我が愛する者の自から起る時まで殊更らに彼を喚起し且つ醒す勿れ(雅歌八章四節)、

世の宗教家等よ、我れ切に汝等に請ふ、是等の純信徒を妨ぐる勿れ、彼等が自から起つ時まで汝等の荒らき不熟練なる手を以て殊更らに彼等を喚起し又醒す勿れ。(四二、四)

資格の作成

若し資格を作るの必要ありとせん乎、神と自己とに依て之を作るべきなり、人に依て作るべからざるなり、政府に依り、教會に賴るは資格を作るの捷徑たるに相違なし、然れども是れ附與せられし資格にして我が資格にあらざるなり、資格は我が品性を以て苦鬪し

て得たる者ならざるべからず、證書を以て與へられし者に非ずして、實功を以て授けられし者ならざるべからず、前者に紙丈けの價値だにあるなし、後者は之を携へて來世に到り、天使の前に誇るに足る者なり。（四二、六）

我が理想の人　善人必しも我が理想の人に非ず、我が理想の人は勇者たるを要す、眞理と正義のために情と闘ひ、慾と闘ひ、友と闘ひ、家と闘ひ、國と闘ひ、世と闘ふ者たるを要す、我は我眼を以て多くの善人を見たり、然れども勇者は之を見しこと甚だ稀なり、我は完全なる紳士を求めず、峻嚴なる戰士を需む、我が理想の人は世と相對して獨り陣を張る者なり、終生の孤立に堪え得る者なり。（四二、七）

自由の衰退　今や人は自由を口にせず、彼等は愛國を說き、成功を語る、然れども古き自由は措て之を省みざるなり。然れども自由を忘却せし民を視よ、疑獄は續發して其底止する所を知らず、國家は其根柢に於て壞れ、事業は其本源に於て敗れつゝあり、古きミルトンの言は今も尙ほ眞なり、曰く「自由の在る所にのみ道德は行はる」と、自由を國賊視して國家は亡び之を異端視して敎會は廢る、自由は今も尙ほ人の生命なり、自由は今も尙ほ盛に之を唱道せざるべからざるなり。（四二、七）

プロテスタント主義　余輩は今尙ほプロテスタント主義を把持す、之を把持して天主敎會、希臘敎會、英國國敎會に反對す、プロテスタント主義は進步主義なり、之を棄るは進步の趨勢に背馳するに等し、余輩は歷史が逆行せざる以上はプロテスタント主義を棄てざるべし。

余輩はプロテスタント主義を把持す、然れども今の所謂プロテスタント敎會に與せず、彼等は能く此主義を代表する者にあらざれば也、プロテスタント主義は之を其論理的結極まで推し行かば無敎會主義とならざるべからず、法王、祭司、監督の敎權を拒む者は論理上すべての人の

教權を拒まざるべからず、プロテスタント主義は人を直に神に繋ぐ者なり、其間に長老、牧師、執事等の介在するを許さゞるなり。

ルーテルはプロテスタント主義を唱へて、之を合宜的に守る能はざりし也、彼は羅馬教會を脱して、之に劣らざる壓制教會を創始せり、カルビン亦然り、ウエスレー亦然り、プロテスタント主義に始まりし長老教會、メソヂスト教會は亦其中に僧侶的階級を設くるに至れり。

純然たるプロテスタント主義の把持者はルーテルに非ずしてレッシング なり、ウェスレー兄弟に非ずしてジョージ・フォックスなり、其精神に於ては文豪エマソンは福音師ムーデーに勝さるのプロテスタント教徒なり、プロテスタント主義は今より四百年前に始まりて今尚ほ完成中にあり、余輩不肖と雖も此貴重なる主義を把持する以上は今日此地に於て其完成を期すべき也、即ち舊教三教會は勿論、今の所謂プロテスタント教會の半プロテスタント主義に反對し、純乎たるプロテスタント主義を今日此國に於て發揮すべきなり。（四二、九）

世界に於ける無教會主義

米國紐育市のプロテスタント教徒は二百餘萬を算し、其中過半數（百七萬餘）は無教會信者なりと云ふ、而して其數は年々增加しつゝありと云ふ、依て知る無教會主義なる者の我國の一隅に現はれたる特發の現象にあらざることを、今より五十年前丁抹國の思想家ゼーレン・クリーケゴードが其强大なる聲を揚げて以來、歐米諸國に於て漸次瀰漫しつゝある主義なり、無教會主義は純キリスト主義なり、神を愛し人を愛するの外に何の勢力をも權能をも認めざる主義なり、人類の進步は此主義を助けつゝあり、科學の進步は此主義を促しつゝあり、無教會主義を嘲ける者の如きは世界の大勢を知らざる者なり。（『米國雜誌』五月號に於ける R、S、ベーカー氏の筆に成れる「紐育市の不信」の一篇を見るべし。（四二、一〇）

前進の聲

エホバ、モーセを以てイスラエルの子孫に命じ給ひける

は『汝等前に進め』と、而してモーセが埃及を去てカナンに向ひしが如く、バウロが猶太教を去て福音を唱へしが如く、ルーテルが天主教を去て新教を創めしが如く、ウェスレーが聖公會を去てメソヂスト教會を建てしが如く、ジョージ・フォックスがすべての教會を去て教友相互の愛を說きしが如く、余輩も亦今の所謂半死半生の新教諸教會を去て更らに新鮮なる自由の境土に向はんかな、前に進まんのみ、餓死を恐れず、單獨を恐れず、失敗を恐れず、破滅を恐れず、前に進まんのみ。 出埃及記十四章十五節。（四二、一〇）

單獨の勢力

カーライル一人は英民族の中に在りて英國全聖公會にまさるの勢力なり、トルストイ一人は露國幷に全世界に於て露國全正教會に勝るの勢力なり、依て知る、人を善に化せんとするに方て教會又は其他の團體に賴るの必要更に無きことを、人は何人も神を信じ、自己に賴り、人を愛して、獨り立て廣く同胞を善化し得るなり。（四二、一二

自由の尊儼

自由は氣儘勝手を行ふの意にあらず、自由は自から己を治むるの意なり、自由は己を神に委ぬ、然れども強いられて委ぬるに非ず、自から求めて委ぬるなり、自由は自から擇んで人の僕たるも、而かも終まで自主たるを失はず、神學も教會も、政府も國家も、然り神御自身も、自由の尊儼を犯して吾人の上に何事をも爲す能はざるなり。（四三、一）

我は我たり

バウロはバウロたり、我は我たり、ペテロはペテロたり、我は我たり、ヨハネはヨハネたり、我は我たり、ルーテルはルーテルたり、我は我たり、カルビンはカルビンたり、我は我たり、ウエスレーはウエスレーたり、我は我たり、我は我主イエスキリストの弟子なり、彼の弟子の弟子にあらざるなり、我は他の弟子に由りて多く學ぶ所あらん、然れども我は主に就ては直に主より學ぶなり、我に主が直に我に示し給ひし我のキリスト觀あり、我は我の立場より我主を仰ぐなり、而して我は

斯くなして高ぶる者にあらざるなり、そは卑くなすは主に由て自由を與へられしすべての者の特權にして又義務なればなり。（四三、六）

我が同志 我が同志は我が許に來りて我と共に働く人に非ず、我が同志は我の如く獨り神に賴りて働く者なり、政府又は教會に賴らざるは勿論、如何なる人にも賴らざる者なり、獨立の人のみ互に相敬し相愛す、眞個の聖徒の交際は獨立人の交際なり、我等互に固く相結ばんと欲せば、相互に賴るを廢めて、各自神に賴りて獨り立つべきなり。（四三、六）

我と福音 我は我なり、福音は福音なり、我れ卑しきが故に福音卑しからず、福音貴きが故に我は貴からず、神は時には貴き寶を卑しき器に託し給ふ、我はたゞ他人を敎へて自から棄られざらんことを努むべきも也。哥林多前書九章二十七節。（四三、七）

諦徳

無感覺 名譽を傷けられたりとて之を心に感ずるが如きは未だ全く我欲に死せざるの證なり、鐵面皮に二種あり、愧を知らざる其一なり、我欲を去て全く世の誹難以上に立つに至る其二なり、吾人は努めて第二種の鐵面皮たらざるべからず。

* * * * * *

ヘルプス曰く「自身に關する希望を全く絶ち、もはや人に愛せられんとするの思念なく、慕はれんとするの欲望なく、名譽を欲せず、威嚴を求めず、恩に酬いられんことを望まずして、其人の唯一の目的は他の人のために盡さんとし又彼等のために一生を終らんと欲するにある者は、甚だ强くして且威猛きものなり」と、以て私欲の減殺も如何程までに運び得べきものなるやを知るべし。（三三、一〇）

目前の義務　凡て汝の手に堪ふることは力を竭して之を爲すべし(傳道之書九章十節)、其何たるを思ひ慮ふに及ばず、凡て正直なると、凡て世を益して之に害を加へざると、是れ吾人が全心全力を盡して爲すの價値ある者なり、世に事業の撰擇にのみ精力を消盡して之を其決行に用ひざる者多し、大事業の端緒は先づ目前の義務を果たすにあり。(三三、一一)

人の善を念ふの益　我れ人の善を意ふて人は我に由て勵され、我は我が胸間の之がために開張するを覺ゆ、我れ或は彼の眞相を誤認せしやも知れず、然れども我は彼の惡を念ふて彼と我との心に暗黑を增さんよりは、彼の善を念ふて彼の改善を援け亦我が靈の開發を促さんと欲す。(三三、一一)

クリスチャンの勇氣　神に賴るにあらざれば何事をも爲し得ざる者はクリスチャンなり、神に賴れば何事をも爲し得る者も亦クリ

チャンなり、世にクリスチャンの如く弱き者あるなく、亦彼の如く强き者あるなし、彼が世人に懦夫視せらるゝと同時に亦彼等の想ひ及ばざる大膽なる行爲に出るを得るは、彼の勇氣と勢力とは彼れ以外、人以上の者より來るものなればなり。(三三、一一)

新祈願　何人に對しても惡意を懷くことなく、萬人に對して好意を表し、總ての機會を利用して善をなし、我殘餘の生涯をして祝福の連續たらしめんと欲す、神よ願くは我が此希願を助けよ。(三四、一)

必勝の確信　我にして若し我自身を世に紹介し、名利を我自身に收めんと欲する者ならんか、我の失敗に終るや必せり、然れども我れ日毎に我肉體を十字架に釘け、我にあらざる者の榮光を世に顯はさんと努めて我が事業の成功は期して待つべきなり、我をして日毎に我が我慾に死せしめよ、然らば我は終に世に勝つを得て萬軍の主と榮光を共にするを得ん。(三四、一)

善惡の鑑別　喜んで人の惡事を語る者は惡人なり、喜んで人の善事を語る者は善人なり、喜んで人の惡事を聽く者は惡人なり、喜んで人の善事を聽くものは善人なり、善人は悲痛を感ずることなくして人の惡事を語る能はず、惡人は不快の念を懷くことなくして人の善事を聽く能はず、人の惡事を聽いて吾人は先づ其之れを語りし人の惡を信ずべきなり。（三四、二）

犧牲　我が名は消ゆるも可なり、願くは我が神の聖名の崇められん事を、我が教會は失するも可なり、願くは我が同胞の救はれんことを、我と我に屬する凡てのものは消盡さるゝも我が神の榮光の日々に益々揚らんことを。（三四、七）

信任　人を信ぜんか、人を信ぜざらんか、人を信ぜざれば危險少し、然れども人を信ずるは我に益あり、我は我が心に於て同情の念の常に燃えんがために多くの危險を冒しても努めて人を信ぜんと欲す。（三

五、三）

謙遜と意氣地無　謙遜なれ、柔和なれ、然れども意氣地無たる勿れ、謙避は勇氣なり、然れども意氣地無は卑怯なり、二者其外貌に於て相似て其内容に於て全く相異なる、而して世に所謂る基督的謙遜なるものにして、卑怯の結果なるもの多し、我等の謙遜をして有り餘るの能力を有する者の謙遜ならしめよ、世の壓迫を怖れて萎縮するの謙遜（退縮）ならしむる勿れ。（三五、九）

敵を愛するの結果　我を憎む人を愛するのは極めて辛らい事である、然し是れ主キリストの命じ給ふ所である故に我れ努めて此事を爲せば、視よ、天の扉は我が心の中に開けて、我は其處に有々と主を其榮光に於て見ることが出來る、辛らいことの背後には最も歡ばしい事が隠れて居る、我等は何事に關はらず勇んで主の命に從ふべきである。（三六、二）

完全の解　我等を憎む者に善を爲すを得て我等は始めて完全なる者の何たるかを知るなり、我等が歡んで此事を爲し得るに至るまでは我等は未だ父なる神を知り得たりと言ふべからざるなり、世に我等を憎み、罵り、妬む者あるは我等が彼等に由て完全き者とならんがためなり、我等は彼等を厭ふて此完全に達するの好機を逸すべからざるなり。（馬太傳五章四十三節以下）　三六、二

忿怒と久耐　忿怒は罪惡にはあらざるべし、然れども是れ大なる危險なり、故に聖書は教へて言へり、**怒て罪を犯す勿れ、怒て日の入るまでに至ること勿れ、惡魔に處を得さすること勿れ**と（以弗所書四章廿六節）怒て日の入るまでに至る時は義憤も却て罪と化し、我儕は惡魔に處を得さしめて彼をして我儕を支配せしむるに至らん、我儕は寧ろ神の榮えの權威に循ひて賜ふ諸の能力を得て強くなり、凡ての事喜びて忍び且つ耐ゆべきなり。（哥羅西書一章十一節）。（三六、二）

聖徒の完全　忍耐は聖徒の特性なり、慈悲、矜恤、謙遜、柔和は皆な忍耐の形像なり、**愛は輕々しく怒らず**と云ふ（哥林多前書十三章五節）、我儕の口より很毒、喧囂の言の全く跡を絶つに至て我儕は始めて天に在す我儕の父の完全きが如く完全しと云ふを得るなり。（三六、二）

宥恕　慈悲、寛容、宥恕、恒忍……我儕のために天に蓄へある所の希望に滿ち充ちて、我等は此等キリスト的の美德を以て充ち溢るゝを得るなり、恕し得ざるは我に空乏あればなり、我れ衷に充實して宥恕は易々中の最も易々たる事なり、充たされよ、而かして容赦せよ。（三六、二）

神聖なる同情　我は人の同情を求めない、それと同時に我は亦た妄りに人に同情を寄せない、即ち神の命じ給はない同情を寄せない、それは我が同情も亦我が屬ではなくして、神の屬であるからである、我は我が欲するまゝに之を使用することは出來ない、神に代つて神の同情を人に寄するに至て我は最も深き同情を其人に寄せることが出來るの

である。（三六、三）

有利なる取引　受くるに吝なれ、與ふるに寛なれ、而うして汝の不足を補ふに神の靈の賜物を以てせよ、若し朽つる斯世の物を以て朽ちざる人の心を喜ばすを得ば何ものか之に優るの有利なる取引あらんや、キリストが宣へる**汝等不義の財を以て己が友を得よ**（路加傳十六章九節）との言は此事を我儕に敎へんが爲めならざるべからず。（三六、四）

クリスチャンたるの確證　敵を愛するとは勉めて敵のために善を謀ると云ふことではない、敵を愛するとは讀んで字の如く敵を愛することである、即ち些少の惡意をも挾むことなしに混なき好意を以て其人の善を念ひ且つ之を謀ることである、爾うして是れ罪に死せる我儕人間が爲さんと欲して爲すことの出來ることではない、是れは聖靈を身に受けてキリストの救ひに與かるを得て始めて我儕の爲し得ることである、敵に對して好意を懷くことが出來るに及んで我儕は

始めて自分のクリスチャンであることを覺るのである。（三六、八）

讀書の目的　我の書を讀むは我れが之に由て智者學者とならんがためではない、我の書を讀むは我れが之に由て人生の秘義に通じ、言らるゝも祝し、窘められるゝも忍び、誚らるゝも勸むるの神の如き心の狀態に達せんがためである、若し我が讀む書にして我に永久に忍ぶの術を敎へずば其れは我に何の善きことをも敎へない者である。（三六、一一）

善行の忍耐　此宇宙は神の造り給ふた宇宙である、故に此宇宙に在て善を爲して其報酬の我等に廻り來らない理由はない、只宇宙の宏大なるが故に原因が結果となりて還り來るまでに多くの日時を取るまでのことである、**汝の糧食を水の上に投げよ多くの日の後に汝再び之を得ん**（傳道之書十一章一節）、我等は只善を蒔いて置けば可い、善は人の無情に由て消えるものではない、蒔たる善を百倍にして其人に還すのが此宇宙の特性である、故に聖書は敎へて曰ふ兄弟よ善を行ひ倦む

こと勿れと（帖撒羅尼迦後書三章十三節）。（三七、一）

與ふる幸の福　受くるよりも與ふるは福ひなり（行傳十章卅五節）

そは人は與へんと欲して與ふること能はざればなり、與ふるに大なる神の能力を要す、神より物を受くるのみならず、神より聖き靈を賜はりて吾儕の慾念を斷絶せらるゝに非れば、吾儕は與へんと欲して與へ得ざる者なり、蓋吾儕が與ふるを得て喜ぶは吾儕が神より與ふるの心を得たればなり。（三七、二）

反應の理　我は人の我を非難するあるを聞けり、我れ亦時には人を非難することあり、我は今我が主に託りて我が心の奥底より我を非難せし人を赦すを得るなり、我が非難せし人も亦我が我を非難せし人に爲せしが如く我に爲すならん、我は他人よりも多くより善き人に非ず他人も亦我よりも多くより惡しき人に非ず、我等は我等の審判くが如くに審判かるゝのみ、我は他人に對して善意を懷いて全世界を我が友となすを得るなり。（三七、三）

基督信徒の寛大　我を憎む者あり、彼は我を憎むに由て多少の愉快を感ず、我れ何ぞ歡んで彼の憎惡の目的物たらざらんや、僞はりて我が所有を掠めし者あり、彼れ之を獲て多少の便宜を感じたり、我れ何ぞ喜んで我が損失を忍ばざらんや、我は神の國に於て永久の冕を戴くべき者なり、今世に於て我が受けし多少の不利、損害、我は之を深く意とするに足らざるなり。（三七、三）

効果ある禁酒禁煙　力の不足を感ずる者にのみ刺激物の必要あり、或ひは煙草の如き、或ひは酒精の如き、多くは是れ人世の激闘に倦怠疲勞を感ずる者に由て用ひらる、然れども力の源なるエホバの神に接して刺激物は我儕に全く要なきに至る、我儕は「神に醉ふ」の快樂を知てより、酒に醉ふの快樂を忘るゝなり、我儕の禁酒禁煙なる者は義務に强ひられてにはあらずして、不必要に出し者ならざるべからず。而して全

く其要を感ぜざるに至つてのみ、我儕は能く禁酒禁煙を持續し得るなり。（三七、八）

歳を忘るゝの法　宴を張りて歳を忘れんと欲するもの多し、然れども之れ歳を忘るゝの方法に非ず、歳を忘れんと欲すれば宜しく善を爲すべし、富者は宜しく其財を捐つべし、智者は宜しく其智を頒つべし、強者は宜しく其力を供すべし、而て斯くして一年の憂苦を忘るべし、憂苦は酒を以て之を散ずる能はず、善行を以てのみ能く之を消滅するを得べし、慈善は無二の忘憂劑なり、我等は年末に際して多量に之を服用して可なり。（三七、一二）

思想の所在　余は思想を得んと欲して數卷の書を渉獵せり、而して何の得る所なかりき、余は小なる善事を爲せり、而して新思想は瀚然として湧き來れり、依て知る、思想は思想にあらざることを、思想は行爲なり、然り、愛なり、愛することなくして思想あるなし、吾人は思想を探らんと欲して書籍に至らんよりは寧ろ勞働に就くべきなり。（三八、二）

キリストの道　責むべき人を責むるは正義の道ならん、然れども人の責を己に負ふはキリストの道なり、キリスト信者は義人以上なり、即ち他人の罪のために罪人として神に罰せらるゝ者なり。（三八、七）

信仰と品性　最も貴むべき者は高氣なる基督信者なり、其次に貴むべき者は高氣なる不信者なり、而して卑しむべき者は高氣ならざる信者と不信者となり、人は先づ何人も高氣なるを要す、高氣ならずして貴き基督教も彼を貴むべき者となす能はず、吾等は人の貴賤を定むるに其表白する信仰を以てせずして、其固有の品性を以てすべきなり。（三八、八）

最も難き事　最も難きことは起て働くことに非ず、最も難きことは靜かに主の時と命とを待つことなり、或ひは一年、或ひは三年、或ひは十年、或ひは二十年、我等各自の信仰の量に循ひ、默して主の命を待つこ

となり、詩人ミルトン曰く「唯待つ者も亦善く神に奉仕す」と、從順なる待命は父なる神の最も喜び給ふ所なり、我等は時には大事を爲さんと欲せずして無爲に安んじて我等の神を喜ばし奉るべきなり。(三九、五)

犧牲の意義 犧牲は讀んで字の如く犧牲なり、即ちすべての快樂を犧牲に供するとなり、肉の快樂のみならず、靈の快樂をも犧牲に供することとなり、**吾神、吾神、何故に我を棄て給ふ乎**と、(馬太傳廿七章四十六節)、是れ十字架上に於ける救主キリストの聲なりき、彼は神に棄てられしの感を懷かざるを得ざるほどの苦痛を嘗め給ひて我等罪人のために救濟の途を開き給へり、**若し我が兄弟我が骨肉のためにならんには或ひはキリストより絶れ沈淪に至らんも亦我が願なり**とはパウロの犧牲の精神なりき(羅馬書九章三節)、我等は世を救はんためには自己は地獄に落つるも可なりとの決心を懷かざるべからず。(三九、七)

俗人と魚 清水に魚棲まずと云ふ、即ち俗人棲まずと云ふ、そは俗人

は魚なればなり、然れども清水に月は映ずるなり、心の清き者は神を見るを得るなり、我等は魚と俗人とに棲まれんが爲に殊更らに努めて心を濁すを要せず、否な、益々明かに眞如の月を映ぜんがために、益々瞭かに神を見んがために我等の心をして益々清からしむべきなり。(三九、八)

聖書の讀方二三 **汝を訟へて裏衣を取らんとする者には外服をも亦取らせよ**、そは汝より奪ひし者は奪はれ、奪はれし汝は更らに善き裏衣と外服とを神より賜はるべければ也、即ち奪ひし者の損失にして奪はれし汝の利得なれば也。(馬太傳五章四十節)

惡を以て惡に報ゆる勿れ、そは神は汝に代りて之に報ひ給へば也、而して彼が汝に代りて報ひ給ふや、汝が思ひしよりも、亦汝が爲し得るよりも、遙かに嚴酷に、且つ顯明に公正に之を報ひ給へば也、汝は自身手を下して汝の敵を罰せんと欲してたゞ僅かに輕く彼を罰し得るのみ、祈禱を以て彼を裁判の神に附せよ、然らば神は汝に代り重く且つ公平に彼

を罰し給ふべし。（羅馬書十二章十七節）

汝等を迫害する者を祝し、之を祝して詛ふべからず、そは大なる裁判の彼等を待つあれば也、彼等は憐むべき者にして憎むべき者にあらず、彼等は屠所に曳行かるゝ羊の如き者なり、彼等が哀哭切齒する日は遠きにあらざる也、恐るべき裁判の日の到來を信ずる者は自己を迫害する者を祝して之を詛はざるなり。同十四節。（四〇、四）

善惡の差別　善とは他なし、善人を善人として接くることなり、惡とは他なし、惡人を善人として信ずることなり、善を爲して然る後に善人を接くるに至るにあらず、善人を接けて然る後に善を爲すに至るなり、其如く又、惡を爲して然る後に惡人を信ずるに至るにあらず、惡人を信じて然る後に惡を爲すに至るなり、信仰は前にして行爲は後なり、先づキリストを信じて然る後に善人となる、先づ惡魔を信じて然る後に惡人となる、人の運命は其信ずるものゝ如何に依て定まる、故に曰へる

あり、**彼を接け其名を信ぜし者には權を賜ひて此を神の子と爲せりと、又獸の印誌を受けたる者は硫礦にて燃ゆる火の池に投入らるると。**約翰傳一章十二節。默示錄十九章廿節。（四〇、五）

神のための善　人を感化せんための善に非ず、神を喜ばせんための善なり、善は人を却て惡に導くの場合あり、キリストの善行は却てイスカリオテのユダを墮落せしむるの機會となれり、善は善を勵すと雖も惡は善に會ふて却て增長す、我等は善を爲すに方て其人に及ぼす感化に注意せずして、その神の聖旨に適ふや否やを究むべき也。（四〇、八）

負けるは勝つ　喧嘩して勝つた當時の心持は甚だ善いものである、然かし其後の心持は甚だ惡いものである、其後の心持より言へば負けた心持は勝つた心持よりも遙かに善い、誠に負けるは勝つて勝つは負けるである、負けて人格は昇り、信仰は進む人に負けるのは神に勝つのである、忍んで人に負ける時に神の慈惠の門戸は開かる、我等は人に

擊たれて神の懷に入るべきてある。（四〇、一一）

最大の異端　最大の異端はキリストの神性を拒み、贖罪、復活昇天を否むことではない、最大の異端は兄弟を憎むことである、聖書は明白に言ふて居る、**愛なき者は神を識らず、神は即ち愛なれば也**と、信仰の正邪は行爲の善惡に由て定むべきてある、其表白の文字に由て斷ずべきてはない。（四一、六）

我が祈願　我れ我が神に向て何をか祈求めん、富か、權力か、智慧か、天才か、幸福か、安全か、將又山を移す程なる信仰か、否らず、我靈よ、我は我が神に向て他を愛するの心を祈求めむ、輕々しく怒らざる心、擊れて赦す心、到る所に溫良の香を放つ心を祈求めむ、我は斯くて衷に充滿する者となり、何物をも有たざるが如くなれども萬物を有つ者とならむ。（四一、九）

儀式と憐憫　世のすべての儀禮に參せざるも可なり、然れども一人の寡婦をして泣かしむる勿れ、貴人の招待に應ぜざるも可なり、然れ

ども孤兒の厚意を斥くる勿れ、狷介たるは惡事に非ず、然れども無慈悲なるは罪の罪たるなり、「我れ矜恤を好みて祭祀を好まず」と主は言ひ給へり、儀禮を行ふに嚴にして矜恤を施すに緩なる者はエホバの僕にあらざるなり。（四一、一〇）

想像と實驗　余は想像せり、人はすべて善人なりと、余は實驗せり、人はすべて惡人なるを、余は想像せり、我れ若し善を以て人に對せば、人は必ず善を以て我に報いんと、余は實驗せり、我れ若し善を以て人に對すれば人は我を侮りて止まざることを、去らば如何にせん、キリストを信ぜんのみ、キリストを信じて侮らるゝと知りつゝ人に善を爲さんのみ、人は人のために愛するを得ず、キリストの愛に勵まされてのみ能く人を愛するを得るなり。（四一、一二）

犧牲と善行　我れ己に失ふことなくして人を援くること能はず、善行は常に犧牲を要す、我れ疲れて人休み、我れ死して人生く、キリスト

は我がために斯く爲し給へり、我も亦人のために斯く爲さゞるべからざるなり。（四二、五）

祭事と同情　善く儀式を司るを得べし、善く聖歌を祝唱するを得べし、善く教義を辯ずるを得べし、善く異端を排するを得べし、然れども一人の寡婦を慰むる能はず、一團の疑を解く能はず、余輩は屢々斯かる聖職を見たり、而かも彼等は手を按かれたる神の教役者なりと云ふ、若し余輩の欲する所を言はしめば、余輩は式を司り得ざるも可なり、聖歌を祝唱し得ざるも可なり、教義に暗らく、異端と親むも可なり、然れども寡婦の涙は之を拭ひ得んことを、懷疑は之を解き得んことを、而して手を按かれたる神の教役者たらずと雖も、同情に富める人類の友たるを得て、單純なる平人の生涯を送らんことを。（四二、六）

善人たるの途　我れ努めて善人と成らんと欲して成る能はず、然れども祈てキリストを心に迎へまつりて直に善人と成るを得るなり、

善人たるは易きが如くに見えて難し、難きが如くに見えて易し、キリストを識て善人たるは甚だ易し、彼を識らずして善人たるは不可能事に近き業なり。（四二、七）

信仰と行爲　信仰なきを悲む信者多し、然れども信仰なきは敢て悲むに足らず、行爲あれば足る、人は何人も常に深く神を感ずる能はず、然れども努めて其誠命を行ふを得るなり、愛を行ふは神を感ずると感ぜざるとに關せず、之を行はんと欲して常に之を行ふを得るなり、信仰は行爲に伴ふ神の恩賜なり、善事實行の必要的狀態にあらざる也。（四二、一一）

友と敵　友とは何ぞ、我が美點を認むる者なり、敵とは何ぞ、我が缺點を指す者なり、友は我が善を勵まし、敵は我が惡を矯む、我が向上を助くるに於ては敵は友と何の異なる所なし、我は我友を愛する如く我敵をも愛すべきなり。（四二、一二）

理想の實行　我等は欲んて我等の理想を此世に於て行ふを得るなり、我等は我等の生命を我等の理想のために犧牲に供して之を此世に於て行ふを得るなり、我等は我等が此世に在る間に我等の理想を行ふ能はず、然れども我等の理想のために斃れて我等の亡き後に於て我等の理想を此世に於て行ひ得るなり、神より理想を授けられし者は禍ひなり、然れども理想を授けられて之を行はざる者は更らに禍ひなり、我等は主イエスキリストに倣ひ、我等の理想のために死して之を此世に於て行はんことを祈求ふ。（四三、六）

援助の秘訣　人を助けんとするに方て外より之を助くる勿れ、衷より助けよ、彼れ自身となりて助けよ、即ち彼に人に助けらるゝの感を起さしめずして彼を助けよ、是れ眞正の虚心たるなり、キリストが己を虚うし給へりと云ふは此事を云ふなり、彼は聖靈として人を助け給ふ、即ち彼を愛する者の意志となりて彼等を助け給ふ、我等は彼に助けらるゝ時に彼の我等を助けつゝあり給ふを知らず、我等自身己を助けつゝありと思ひ、後に至り、回顧して彼の我等を助け給ひしを覺るなり、渠の援助を口にし之を齎らして人に臨む者は眞に人を助くる人にあらず、先づ自己を人に與ふるにあらざれば眞正に彼を助くる能はざるなり。（四三、六）

患難

主義と主我

イエス曰ひけるは若し我に從はんと欲ふ者は己を棄て、其十字架を負ひて我に從へ。（馬太傳十六章廿四節）

世に所謂主義の人にして實は主我の人多きは事實なり、彼は自我の意見を遂行するをば稱して主義を貫徹するとは云ふなり、然れども吾人は主義と主我とに霄壤の別あるを認めざるべからず。

主義は我れ以外のものにして、自己とは何の關係なきものなり、否な何の關係なきのみならず、主義は主我の正反對にして前者の貫徹は後者の夷滅を要するなり、自己の名譽を感ずるに敏く、その存在を認められざるを以て無上の恥辱となす者の如きは主義を實行し得ざる者なり。（三三、九）

恥辱と榮光

キリストは己を卑し、死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり、是故に神は甚しく彼を崇めて諸の名に超る名を之に予へ給へり（腓立比書二章八、九節）

榮光は恥辱の後に來る、人に嘲けられ、踐み附けられ、面前にて卑められ惡人として、僞善者として、彼等の蔑視する所となりて、然る後に吾人に榮光は來るなり、然り、恥辱は榮光の先驅なり、開路者なり、春の夏に先立つが如く、月缺けて後に其滿るが如く、恥に遭ふて吾人に榮光の冠を戴くの希望あり、吾人は喜んで人の辱めを受くべきなり。（三三、九）

余の敵人に謝す

諸君ありしが故に余の友人は余にとりては一層愛すべきものとなれり、諸君が余を苦めしが故に余は一層天國に近くなれり、諸君が殘忍なる嘲弄の劍を以て余の心臟を刺りしが故に余は一層深く余の救主の心事を探り得て、余の人世に關する智識に於て余の未來に關する觀念に於て、余は前の日に優るの人とはなれり、諸君にして若し余を憎まざらんか、今世は余に取りては一つの樂園となり

て、余は墓の彼方にある聖者の國を望まざりしならん、諸君の胸中に量るべからざるの宥恕ありて、余を遇するに神の如きの愛心を以てせられしならん乎、余は終には諸君を神とし仰ぐに至て、天上に在す余の眞正の神より離絶するに至りしならむ、諸君の無情は余に取りてはギリアデの香料に勝るの藥品なりし、諸君の嘲弄はシロアムの池の水に勝るの洗滌劑なりし、諸君は多くの點に於て余の恩人なり、諸君願くは諸君の攻擊と罵詈と冷笑とを續けよ、余は愈々益々深く諸君に謝する所あらん。(三三、一〇)

天恩 我が恩惠汝に足れり(哥林多後書十二章九節)

人生の苦痛にして神の恩惠を以て癒し得ざる者あるなし、愛する者の失せし時、國人に捨てられし時、貧に迫りし時、不治の病に罹りし時、神を信じて吾人に有り餘るの慰藉あり、世に何物か神の恩惠に優るの靈藥あらんや。

* * * * * * *

神に癒されし後の快さよ、神は或時は吾人を深く傷けて深く癒し、以て彼の醫癒の力の如何に大なる乎を吾人に知らしめ給ふ。

* * * * * * *

艱難は之を受くる時に決して悅ばしき者にあらず、然れどもその忍耐の實を結びて、より高き信仰を吾人に供するに至て、吾人は艱難を我が姉妹なり我が兄弟なりと呼ぶに至る、神の造りし者にして實は艱難に優る者はなけん、そは他の物は吾人に示すに神の力と智慧とを以てすれども、艱難は吾人を導きて直に神の心に抵らしむればなり。(三三、一〇)

辛らき事三つ 辛らき事の一は同宗教の人に異端論者として詛るゝ事なり、余は此時に教會を去て汎く同情を天下に求めたり。

より辛らき事は國人に逆賊として捨てらるゝ事なり、余は此時に國家的觀念を去て汎く萬國を友とするに至れり、

最も辛らき事は友人に僞善者として指さゝる、事なり、余は此時に方て人世其物を疑ふに至り、思念を全く今世より絶て未來と天使とに余の希望を繫ぐに至れり。

逝けよ教會、逝けよ國人、去れよ汝等友として余に附隨し來りし者よ、汝等悉く余を去て余は始めて人世の如何に價値なき者なる乎を了れり（三三、一〇）

基督信徒の敵

彼の家族の者なり、**人の敵は其家の者なるべし**、―馬太傳十三章三十六節）、彼の親友なり、**我が親しき者はみな我が躓くことあらんかと窺ふ**、―耶利米亞記二十章十節）、彼の同國の人なり、（預言者**はその故鄉、その親戚、その室家の外に於ては尊ばれざることなし**、―馬可傳六章四節）、**基督を信ぜざりし者は彼の骨肉の兄弟なりし**（約翰傳七章四、五節）、預言者エレミヤを殺さんとせし者は彼の同鄉の者と兄弟となりし（耶利米亞記十二章九節）、ヨッブを嘲り罵りし者も亦た彼の近親

の者なりし（約百記三十章）、神を信じ基督を崇めんとせし者にして未だ曾て其兄弟に誤解され、友人に嘲けられ、世に狂人、僞善者視せられざる者ありしを聞かず、弟子は其師より大なる能はず、師にして國を賣る者として、神を瀆す者として十字架の耻辱を受けしならば、況して吾人彼の弟子たる者に於てをや。（三三、一一）

棄てられたる石

工匠の棄てたる石は家の隅の首石となれり（馬太傳二十一章四十二節）、父母に棄てられたる子は家を支ゆるの柱石となり、國人に棄てられたる人は國を救ふの愛國者となり、教會に棄てられたる信者は信仰復活の動力となる、「是れ主の行し給へることにして我儕の目に奇とする所なり」、舜然り、ダンテ然り、ルーテル、ウエスレー皆な然らざるなし、之に反して寵子は父母を惱ましし、寵臣は國家を危ふし、教會の愛兒は無神論を唱ふ、吾人は父母と兄弟と國人と教會とに嫌惡せられて反て吾人の名譽を感ずべきなり。（三四、二）

愛の世界 神に愛せらるゝに至るが人生第一の目的なり、此目的に吾人を達せしめんがために神を信じて世に憎まるゝの必要生じ、義を守て人に嘲けらるゝの必要起り、善を爲して却て惡人視せらるゝの必要は出しなり、世に患苦と稱へらるゝものは皆な吾人をして神に愛せられしめんがために在るものなり、故に吾人は神は愛なりと云ひ、宇宙は愛の機關なりと唱ふるに躊躇せざるなり。(三五、六)

懲治的患難 我等神を信ずる者に取ては患難は懲治也、是れ我等を殺さん爲の者に非ず、我等を癒し我等を活かさん爲の者也、患難なき者は神に愛せられざる者なり、誰か父の懲めざる子あらん乎、**衆の人の受くる懲治にして若し汝等になくば汝等は私生兒にして實子に非ず、又我儕の肉體の父は我儕を懲らしめし者なるに我儕は尚ほ彼を敬へり、況して靈魂の父をや、我儕は彼に服ひて生命を受くべきなり、……凡ての懲治は其當時は悅ばしきものに非ず、否な、反て悲しと意はるゝものなり、然れども之に由て鍛錬されし者には後には平康の果を結ばせり、即ち義の結果なる平康の果を結ばせり。**(希伯來書十二章)(三五、一一)

基督信徒の徽章 苦痛の極は善を爲さんと努めつゝある時に人に惡しく思はるゝことなり、然れども是れキリストの受け給ひし苦痛にして吾等は此苦痛を味うことなくしてキリストと偕になりて彼の聖國に入る能はざるなり、十字架上の苦痛とは斯かる苦痛を指して謂ふなり、此苦痛は是れキリスト信者の徽章なり、是れなくして吾等は天國の市民たる能はざるなり。(三五、一二)

最大幸福 苦む事は善き事なり、吾等は之に依て神を識るを得るなり、神を識るは永生なり、而して吾等若し苦しまずして永生に達する能はずとせば何物か苦しむ事に優るの福祉あらんや。(三五、一二)

患難と榮光 彼基督は神の體にて居りしかども自から其神と匹く在る所の事を棄て難きことゝ意はず、反て己を虛うし僕の貌をとり

て人の如くなれり、既に人の如き形狀にて現はれ己を卑くし死に至るまで順ひ十字架の死をさへ受くるに至れり、是故に神は甚しく彼を崇めて諸の名に超る名を彼に予へ給へり、此は天に在るもの地に在るもの及び地の下にあるものをして悉くイエスの名に由て膝を屈しめ、且つ諸の舌をして悉くイエスキリストは主なりと稱揚はして父なる神に榮を歸せしめんためなり(腓立比書二章六節—十一節)。(三五、一二)

歌の供給者 或る時我に思想絶えたり、我は歌ふに歌なく、語るに言辭なきに至れり、其時人あり來りて無情の劍を以て我が心を刺せり、我は甚く苦痛を感ぜり、我は悲鳴の聲を揚げたり、然るに視よ、彼が殘せし傷口より思想の玉泉は流れ出て、我が信仰の眼は開らけ、讃美の歌は再び我唇に還りたり、其時我は痛める我が傷口を抑へながら云へり、「無情なる深切なる敵人よ、汝は我に新しき歌を供せり」と。(三五、一二)

勝利の生涯 患難を避けんとする勿れ、之に勝たんとせよ、獨り自

から之に勝たんとする勿れ、神に緣て勝たんとせよ、神が患難を下し給ふは我等に由て彼の能力と恩惠とを顯はさんためなり。(三六、一)

神力の試驗 「憂き事の尙ほ此上に積れかし、窮りある身の力試めさん」とは山中鹿之助の歌なり、「憂き事の尙ほ此上に積れかし、窮りなき神の力試めさん」とは基督信徒の歌ならざるべからず、**我儕終日爾の爲に死に付され屠られんとする羊の如くせらるゝ也、然れども我儕は我儕を愛める者に賴り總て此等の事に勝得て餘りあり**(羅馬書八章卅六卅七節)とは基督信徒の實驗なり。(三六、一)

我の欣び 我れ死を忘れて斯世の人と化せざらんがために神は我に病を賜ふて我をして常に死と墓とに就て念はしめ給ふ、我れ人を愛して神を捨つるに至らざらんがために神は我に敵人を賜ふて我をして常に人世に就て嫌惡の念を懷かしめ給ふ、我が患難と苦痛とは凡て我が靈魂のためなり、**この故に我は寧ろ欣びて自己の弱きに誇らん、是**

れキリストの能我に寓らん爲なり（哥林多後書十二章九節）（三六、四）

恩惠と困難

恩惠は直に來るものではない、困難を透うして來るものである、困難は恩惠を身に呼ぶための中間物である、燃料なくして火がないやうに困難がなくして信仰も歡喜もない、火に先立つものは煙である、信仰に先立つものは疑懼である、煩悶である、是れありて、是れに天よりの火が點りて始めて天よりの平安と喜樂とが我儕の心に臨るのである、困難を經ずして深き信仰を得んとするは先づ煙を見ずして光と煖とを得んとするが如くである。

* * * * * * *

夫れ故に我儕神の心を識るものは困難の到來を見て決して驚いてはならない、是れは恩惠の先馳である、然り、恩惠の初期である、今や光明が潮の如くに心に充ち溢れんとするに先立つて、茲に暗らく見ゆる天使が來て我儕の頑固なる心の水門を打破るのである、我儕の無智なる、時

に或は此天使を拒んで彼の持來れる恩惠をも斥けんとする、憫むべきは實に神の心を識らざる人である。

* * * * * * *

「神は碎けたる心を嘉し給ふ」と、蓋先づ碎かるゝにあらざれば種を受くること能はざればなり、農夫は知る硬土の紛碎深ければ深き程、果穀の生長の好良なることを、神も亦知り給ふ、心の紛碎深ければ深き程、神の道の生長の宜しきことを。（三六、九）

難問題の解釋

我等の身に附隨して難問題が澤山あります、爾うして我等自から之を解釋せんと欲して時には非常に苦みます、然し是れ神を離れて解釋さるべきものではありません、是れ神の智慧と能力とを意識せんために我等に供へられた問題であります、故に、私共はその私共に供せられし目的に適ひ、神に到り、神の智慧と能力を藉りて其解釋を試むべきであります、爾うすれば如何なる難問題でも容易し

く解けまして、私共は困難より免かるゝと同時に神を識ること益々深きに至ります、人生の難問題は私共の信仰を増すために與へられるものであります、夫れ故に私共は獨りて之を解釋しやうとしては成りません、**汝等我を離るゝ時は何事をも行ふ能はず**とキリストは敎へられました。（約翰傳十五章五節）。（三、七、四）

幸福の秘訣　斯世に在て幸福ならんと欲する勿れ、然らば幸福なるを得べし、斯世の不幸は吾等が幸福ならんと欲するより來る、斯世に在ては憎まれんと欲せよ、誤解せられんと欲せよ、迫害せられんと欲せよ、然らば吾等は幸福なる者となりて神と偕に永久の平和を樂むを得ん。（三、八、八）

眞個の基督信者　**或人は嘲笑を受け、鞭撻れ、繩縛と囹圄の苦を受け、石にて擊たれ、鋸にて挽かれ、火にて焚かれ、刀にて殺され、棉羊と山羊の皮を衣て經あるき、窮乏して難み苦めり、世は彼等を置くに堪へず、彼等は曠野と山と地の洞と穴とに流浪せり**（希伯來書十一章卅六、卅七、卅八節）、基督信者とは斯の如き者なりし、基督信者とは斯の如き者ならざるべからず、かの政府に寵愛され、國民の人望を惹かんとする今の敎會信者の如きは基督信者に非ざるなり。（三、八、八）

窄き路　一方に宗敎界あり、他方に俗世界あり、宗敎界に妬忌、讒害、毀謗、分爭、結黨、詭譎あり、俗世界に不義、惡慝、貪婪、兇殺、醉酒、放蕩あり、前者にすべての靈なる罪は存し、後者にすべての肉なる罪は行はる、二者の間に窄き路あり、玆に貧困、飢餓、裸程、迫害、十字架あり、然れども生命に入るの路は唯此一途あるのみ、我等は主の迹を逐ふて此窄き途を辿らざるべからず。馬太傳七章十三節（三、九、四）

迫害の益　迫害は我がためにのみ益あらず、世のためにも亦益あり、我は之に由て多少世の罪を贖はしめらる、我は喜んで之に當るべきなり。（三、九、六）

小なる救主　キリストは我等の罪を負ひ給へり、我等も亦キリストに在りて世の罪の幾分を負はざるべからず、道を說くのみが基督信者の本分に非ず、彼はまた人に苦しめられて世の罪の幾分を贖はざるべからず、彼が神に召されしは自から救はれんがためのみにあらず、キリストと偕にまた世の罪を負はんがためなり、贖罪はまた彼の本分なり、彼はキリストと偕に苦しめられて小なる救主とならざるべからず。（三九、六）

犧牲の榮光　心に神の默示に接して口を啓いて之を宣傳ふるは大なる榮光なり、然れども身に世の罪を負はせられて口を噤いて之に耐ゆるは更らに大なる榮光なり、傳道者たらんと欲するものは多し、罪の犧牲たらんと欲する者は尠し、我等は感謝して「口を啓かず屠場に牽かるゝ羊羔」の職に就くべきなり。以賽亞書五十三章七節。（三九、六）

患難の解釋　患難は之を消極的に解すべからず、積極的に解すべし、之を神の刑罰として解すべからず、神の恩惠として解すべし、神の憤怒の表彰として解すべからず、其慈愛の示顯として解すべし、雲の柱は火の柱として解すべし、旋風は神の鳳輦として解すべし、患難はすべて身の患難にして靈の幸福なり、靈の幸福と解してすべての患難は患難たらざるに至る。（三九、六）

恩惠としての患難　患難、若し自己の罪の結果ならば自己の罪を贖ふために利益あり、若し他人の罪の結果ならば他人の罪を贖ふために利益あり、神は無益に患難を下し給はず、之を自己か又は他人を救ふために下し給ふ、患難はたしかに神の恩惠なり、之れなくして我も人も罪惡を去て正義の神に歸る能はず。（三九、七）

損失の利益　肉に於て足るは靈に於て滿つるの途にあらず、靈の健全は肉の減殺を以て維持せらる、肉に於て飽かん乎、靈に於て死すべし、故に慾望は充分に達せられざるを宜とす天國の門は地上の失望に

由て開かる、肉に於て失ふだけ夫れだけ靈に於て得る所あり、我等は勿論強ひて損失を招くべからず、然れども常に損失の利益なるを知つて、足らざるの故を以て感謝滿足すべきなり。捉摩太前書六章六節。(三九、一二)

基督信者の眞僞 **光は暗に照り暗は之を曉らざりき**と(約翰傳一章五節)、**彼れ己の國に來りしに其民之を接けざりき**と(仝十節)、**羔は世の始より殺され給ひし者なり**と(默示錄十三章八節)、仍て知るべし、世に了解され、其受くる所となる者はキリストの僕にあらざることを、基督信者の眞僞は之に由て分つを得べし、即ち世の人望を博せし者、是れ僞の信者なり、世と常に鬪ひ永久に之と和睦せざる者、是れ眞の信者なり、基督信者の眞僞は容易に是を分つを得るなり。(四〇、二)

戰友となれよ 我を師と稱ぶ勿れ、そは我は人の師に非ず、キリストに在りて此世と鬪ふ者なれば也、我が戰友となれよ、此世に對して戰爭を宣告し、其憎む所となり、逐ふ所となりて然る後に我に來れよ、其時我等は互に手を執て語らん、我が「崇拜者」は我れ多く之を有す、然れども我は戰友の乏しきに苦む、然り、我を師と稱ぶを止めよ、來て我が戰友となれよ。(四〇、二)

事業としての苦痛 苦むは大なる事業なり、之に由りて我は自己の愆を示され、他人の罪を贖はせられ、又新たに同情の區域を增して、より多くの人を慰むるの能を供せらる、我は學んで救はるゝに非ず、苦んで全うせらるゝなり、智識を供して世を濟ふに非ず、同情を寄せて人を助くるなり、福音は苦痛に存す、キリストの福音はキリストの受難に外ならず、苦痛の深き丈け夫れ丈け恩惠の深きは感ぜらるゝなり、又恩惠の深きを傳ふるを得るなり、苦痛は徒勞として見るべからざるなり。(四〇、五)

十字架の教 キリストの教は十字架の教なりと云ふ、然り、然ども十字架を仰ぐ教にあらず、又十字架を唱ふる教にあらず、身に十字架を

負ふ敎なり、然り、身に十字架を負はせらるゝ敎なり、キリストを信ずる必然の結果として此世と此世の敎會とに批れ又唾せらるゝ敎なり、十字架を負ふことなくして基督敎あるなし、十字架を負はざる基督敎は僞はりの基督敎なり、今の所謂「基督敎」の如きは是れなり。（四〇、九）

感謝の回想　我は曾てエレミヤと共に歎じて言へり、**嗚呼我は禍ひなる哉、人皆な我と爭ひ、我を攻む、皆な我を詛ふなり**と、然れども今に至りて我は感謝して曰ふ、嗚呼我は福ひなる哉、人皆な我と爭ひ、我を攻め、我を詛ひたれば我は神に結ばれて其救濟に與かるを得たりと、人に捨らるゝは神に拾はるゝなりき、人に憎まるゝは神に愛せらるゝなりき、人に絕たるゝは神に結ばるゝなりき、今に至りて思ふ、我が生涯に有りし事にして最も幸福なりし事は世に侮られ、嫌はれ、辱められ、斥けられし事にてありしことを。耶利米亞記十五章十節。（四一、三）

苦痛は事業　苦痛は勢力の空費に非ず、善事の遂行なり、我等は忍

んで苦痛に耐えて人を神に導き神を人に紹介するを得るなり、キリストの事業は斯かる事業なりし、我等も亦彼に倣ひて能く苦痛に耐え、以て**キリストの患難の缺けたる所を補ふべき也**。哥羅西書一章二十四節。（四一、八）

回顧の涙　神、我を呪ひ給へりと思ひし時に我は神に惠まれしなり、其時我は我が能力以上の事業を神に爲さしめられし也、其時我はキリストに倣ひ、我罪ならぬ他人の罪を負はしめられしなり、價値なき我はキリストと偕に苦むに足る者として認められしなり、榮光何ぞ之に過ん、幸福何ぞ之に若かん、靜想默思、前事を顧みて我は時に感謝の涙を禁ずる能はざるなり。（四一、八）

逆境の感謝　逆境を歎ずるを休めよ、此邪曲の世に在て順境こそ寧ろ歎ずべきものなれ、我等世に逆つて立ちし者、逆境は我等の豫め期せし所なり、我等は却て之を歡び、昔時の信徒と共に**イエスの名のため**

に辱を受るに足る者とせられし事を喜びて神に感謝すべきなり。（使徒行傳五章四十一節。（四一、一〇）

不遇の慰藉　我れ歳を經るも世と和らぐ能はず、之と衝突し軋轢して今猶ほ止まず、我れ之を見て心甚だ憂ふ、エレミヤと共に叫び曰ふ

嗚呼我は禍ひなるかな、我母よ、汝、何故に我を生みしや、全國の人我と爭ひ我を攻む、我れ人に貸さず、人、亦我に貸さず、皆な我を詛ふなり（耶利米亞記十五章十節）

と、時に神の聲我衷に臨みて曰ふ、汝何故に心に憂ふるや、世は全く我を去りし者なるに汝は我に近かんと欲す、茲に於てか世と汝との間に不和あるなり、汝が世と和する時に汝は世と共に亡ぶべし、衝突は生命の猶ほ汝に存する證據なり、軋轢は汝が未だ世と共に詛はれざる徴候なり、汝の憂愁は感謝と變ずべきなり、そは汝は汝の神の敵と和する能はざればなりと。

我れ此聲を聞き更に聖書を繙き見れば、聖書は我に告げて曰ふ

我等は神に就き、世は擧て惡者（惡魔）に服するを我等は知る（約翰第壹書五章十九節）。

世、若し汝等を惡む時は汝等よりも先に我を惡むと知れ、汝等若し世の屬ならば世は己れの屬を愛すべし、然れど汝等は世の屬ならず、我れ汝等を世より選びたり、之に因て世汝等を惡む。（約翰傳十五章十八、十九節）。（四一、一二）

最大感謝　感謝すべき事は澤山ある、然し、イエスの名のために苦しむ事が出來しこと、之に優さるの感謝はない、イエスの名のために國人には國賊として斥けられ、社會には僞善者と稱ばれ、教會には危險物として嫌はれ、親戚知友にまで愚物、融通の利かぬ者として嘲けられしこと、是れイエスに從ふ者に取つては最大の名譽であつて、最大の感謝を値ひすべきことである、是れ正しく我等が身に佩びるイエスの印記で

あつて我等は此勳章を佩びてこそいつか彼の前に立つことが出來るのである。加拉太書六章十七節。(四一、一二)

損失の利益　一友人を失ふは更に他により善き友人を得んがためなり、一事業に失敗するは更らに他により貴き事業に成功せんがためなり、壞る此世の物を失ふは壞ざる天に寶を積まんためなり、失ふは得ることなり、損失なくして利德あることなし、損失は恒に利德の前驅なり、損失の我等に臨む時に、我等は感謝して、希望を以て之を迎ふべきなり。(四二、二)

困難の歡迎　人に來る事はすべて我にも來よかし、疾病も來よかし、重稅も來よかし、骨肉の反逆も來よかし、友人の裏切も來よかし、世の無慈悲なる批評も來よかし、社會の冷酷なる待遇も來よかし、是れ皆な人に來る事なり、惟り我にのみ來らざるの理あらんや、我は獨り神の寵兒として存在せんことを欲せず、人に來るすべての惡事を身に受けて

人と共に悲み、又人と共に神の恩惠を仰がんと欲す、困難は我をして神に接近せしめ、又人に鍛接せしむ、困難は我の單獨を破り、我をして人類の一員たらしむ、尊むべきかな困難！(四二、二)

讀書と苦痛　人は我に就て言ふ、彼れ多く讀みたれば多く語るを得と、然れども我は自己に就て言ふ、我れ少しく苦みたれば少しく語るを得と、目に讀んで筆に綴るは易し、心に苦んで文字に顯はすは難し、而かも我は深く我神に感謝す、我も亦少しく苦むを得たれば少しく人生の事實を語るを得るを。(四二、三)

忍耐と勝利　艱難に耐ゆるは善し、然れども之に勝つは更らに善し、敵を支ゆるは善し、然れども之を追ひまくるは更らに善し、我等は低頭長顏以て艱難を欺つべからず、蹶起笑顏以て之を足下に踏みつくべきなり、世に勝てる者我等と偕に在し給ふ、我等彼に賴りて何故此事を爲し得ざらん乎。(四二、六)

幸不幸　此世に在りて最も幸福なる事は善を爲して榮えざる事なり、其次ぎに幸福なる事は善を爲して榮ゆる事なり、第三に幸福なる事は惡を爲して榮えざる事なり、而して最も不幸なる事は惡を爲して榮ゆる事なり、第一の場合に於ては人は天國を讓り受くるの希望あり、第二の場合に於ては彼は現世を樂むを得べし、第三の場合に於ては彼は過去の罪を償ふを得べし、而して最後の場合に於ては彼は地獄に墮るの危險あり、何れにしろ困窮は安全にして繁榮は危險なり、吾人は前者を忌みて後者を美むべからざるなり。（四二、一二）

失敗の恩惠　教會の基督教は成功に於て神の恩惠を認む、之に反してキリストの福音は失敗に於て神の愛を示す、最大の恩惠はキリストを識るにあり、而して失敗の十字架を味ふてのみ能く十字架のキリストを識るを得るなり。（四三、四）

失敗と成功　失敗は失敗にあらず、失敗は成功に達するの階段なり、花落ちて實結ぶが如く、種死して芽出るが如く、失敗を重ねて成功は來るなり、失敗は成功の順路に他ならず、全き者來らんがために全からざる者廢るなり、然れば失敗せりとて何をか悲まん、成功の一歩近きしを喜び、感謝して働くべきなり。（四三、七）

信仰と失敗　キリストを嫌ふ此世に於て成功して人はキリストの忠實なる僕にあらず、彼はキリストに反かずして此世に於て成功する能はざるなり、眞實にキリストを信ずる者が此世に於て失敗するは當然なり、我等は身にキリストの詬辱を負ひて此世に在りて彼の證人として立つべきなり。希伯來書十三章十三節。（四三、九）

天國及來世

永生　永生他にあらず、神と共に在ることなり、天國他にあらず、神の在し給ふ處なり、神の靈我が心に宿りて、我れ我が神の造り給ひにし此宇宙に棲息して、我は今より既に永生を享け、神の天國に在る者なり。（三三、一一）

至大の恩賜　信仰の力と天國の希望、是れは神がその惠まんと欲する者に與へ給ふ最善最美の賜物である、神は此賜物を授けんがためには多くの痛き切斷術を吾人に施し給ふ、神はそれがためには或時は吾人の企圖を悉く覆へし給ふ、或時は亦吾人を獨り孤島に遣し給ふ、亦或時は吾人をして神に詛はれし者の如くに思はしめ給ふ、然れども試練其効を奏して天國の門が吾人の眼の前に開かるゝ時には、吾人は既に斯世の者にあらずして、天國に移されし者であることを曉るのである、天國に入るとは此肉體が天堂に遊ぶと云ふことではない、是れは至明至靜の歡喜であつて、之を知つて之を口にすることの出來ないものである、吾人は此恩賜に接して世の成功なるものゝ糞土に等しきものであるのを知る、此實物を心に獲て吾人は至大の富貴を感じ、世の瑣々たる數十百萬の富に誇る者を見て、心窃かに憐憫の情を懷くに至るのである。（三六、六）

天國の一瞥　我等の見んことを欲するものは龍動でも巴里でもない、我等は天國を見んことを欲する、天國は容易に見ることの出來る者ではない、然し是れが見えた時には我等の宇宙觀と人生觀とは一變する、其時には路傍の草までが我等の爲に讃美歌を唱へるやうになる、其時には我等の涙はすべて拭はれる、我等の疑問はすべて解ける、斯世は直に樂園と化する、勇氣は湧き出づる、怨恨は失する、天國の一瞥は實に魔術者の呪杖である、是れに由て煩混錯雜を極むる此宇宙も瞬間に

して整齊完備せる整體と化する、而して我等は此汚濁の地に在て、神に祈つて此恩惠に與かる事が出來る。（三六、六）

天國の法律　聖書の道德は天國の法律である、故に是れは天國の希望を懷かない者の守ることの出來るものではない、天國の希望を與へないで聖書の道德を强ふる者は無理を强ふる者である、是れは恰かも貧者に課するに富者に課するの稅を以てするの類である、而かも斯かる壓制家は今の宗教家の中に尠くない。（三六、六）

我儕の問題　我儕の講究しつゝある問題は事態の變遷とは少しも關係のない問題である、是れは滿洲が露西亞の屬となるふが、或は日本の屬となるふが、或は露西亞が亡びやうが英國が亡びやうが其事には何等の關係を有たない問題である、是れは神と基督と永遠と靈魂とに關する問題であつて、是れは天上に輝く星が地上の變遷と同時に少しも其色と光とを變へないやうに、世と共に移らず、時と偕に變らない

問題である、我儕は朽つる斯世に在て朽ざる國の事を研究しつゝある者である。（三六、七）

天國の希望　心の貧き者は福ひなり、天國は即ち其人の有なればなり。義きことの爲に責めらるゝ者は福ひなり、天國は即ち其人の有なればなり。天國！天國！我等の理想は是れなり、我等の目的は是なり、我等は其市民たるの特權に與からんと欲す、我等は其處に冕を載くの榮譽に與からんと欲す、而して是に入るの契約の我がために設けられしを信ずるを得て、我は短かき斯世に在て如何なる辛苦をも忍び得るなり、此希望の我等に供せられて、嘲笑何物ぞ、饑餓何物ぞ、裸程何物ぞ、天國を我が有となさんがためには劍も逐放も絶交も死刑も我は喜んで之を受けん、愛の神は報賞なしに我等に困苦を强ひ給はず、終まで忍ぶ者は救はるべし、歡んで現世の侮辱に耐ゆる者はキリストと偕に永遠に治むるを得ん、我等の忍耐の理由は單に天國の希望に存す。（三六、九）

天國は近づけり 福音は路傍の草にあり、野の小川にあり、大洋の怒濤にあり、重巒の巔を拂ふ砂漠の風にあり、民の移動にあり、國の衝突にあり、神は世の風雲に乘じて進み給ふ、我儕は活劇の順路を知らず、然れども其終極の必ず神の勝利に歸するを知る、人の怒も亦終に神の義を行ふに至る、我儕は艨艟の鯨波を衝くを見て、天國の此地に臨むことを更らに一層急なるを覺ゆ。（三六、一一）

晝夜の別 世の夜は我儕の晝なり、世の晝は我儕の夜なり、我儕は人の泣くべき時に歌ひ、人の歡ぶべき時に悲む、是れ我儕が人と哀樂を偕にせざるが故に非ず、我儕の望む天國は星界の如くに世の暗黑に遭遇するにあらざれば之を觀ること能はざればなり。（三七、二）

永久 永久の個人あるなし、亦永久の國家あるなし、然れども永久の靈魂あり、亦靈魂を救ふに足る永久の眞理あり、我儕永久に築かんと欲する者、豈永久のために竭す所なくして可ならんや。（三七、七）

希望の滿足 世に理想の人なし、又理想の社會なし、我れ是を思ふて、我心、時に我が裏に沈む。

然れども是れ當然の不平なり、又無益の不平なり、吾等は現世を以て滿足すべからず、又現世に於て滿足を索むべからず、**吾等の國は天に在り、吾等は救主即ちイエスキリストの其處より來るを待つ**（腓立比書三章廿節）、吾等は今、斯世に在て理想を待つ者なり、而して之を待つに因て稍や少しく之を實にするを得る者なり、吾等の今の滿足は希望の滿足なり、實現の滿足は吾等は之を後の日に於て見ん。（三七、七）

宗教の領分 宗教は斯世のために有益なり、然れども宗教は斯世のためにあらず、宗教は靈の事なり、亦天の事なり、斯世の改良を以て宗教の目的となす者の如きは未だ宗教の何たるかを知らざる者なり。

永生の尊貴 永世の尊きは其永きが故に非ず、其聖きが故なり、其（三七、八）

永きを欲して之を求むる者は竟に之を獲る能はず、永生は神の生命なり、神の生命なるが故に永からざるを得ざるなり、之を永生と稱せしは不幸なり、そは其貴きは其量に於てよりは寧ろ其質に於て存すれば也。（三八、三）

人生の最大事　我儕は此世界は竟に如何なる乎を知らない、然かし我儕は神は彼を愛する者に聖靈を賜ふて之を其子と成し給ふことを知る、人生の最大事は政治ではない、亦軍事でもない、人生の最大事は宗教である、即ち此移變り行く世に在る間に移變らざる世に入る準備をなすことである、我儕は此世界が滅びつゝある間に神の子となりて永世を承け繼ぐことが出來る。（三八、三）

最大事件　陸の絶東に滿洲事件あり、其絶西にモロッコ事件あり、而して二者の中間にクリート島事件あり、而して人は言ふ、是れ目下の最大事件なりと、然れども是れ斯世の事件にして斯世の失すると共に消え失する事件なり、然り人生の最大事件は外にあり、未來の裁判是なり、是れ斯世と共に消えざる事件なり、而かも人の此事件に注意する尠し。（三八、四）

永生の解　永生は後に來るものにあらず、今既に在るものなり、永生は神の生命にして時の關係なきものなり、即ち前にありしものにして今あるもの、而して未來永劫にまであるものなり、今既に永生を有たざる者は未來に至るも之を得るの理なし、余輩が來世の存在を唱ふるはキリストに顯はれたる神の生命の不死無窮なるを信ずるが故なり、余輩は人に未定の來世を說いて彼に善行を勸めんとは爲さず、余輩は彼に確實の永生を傳へて、彼をして今より不朽の人たらしめんと努む、永生の獲得は之を現世に於て爲すべし、來世に於て之を爲さんとするも蓋し爲し得ざるべし。（三八、六）

地上の天國　神と、天然と、幸福なる家庭と、少數の友人と、是れがあ

れば澤山である、其他は要らない、政黨も要らない、教會も要らない、長官も監督も牧師も要らない、我がすべての幸福はこの四つのものゝ中にある、官職何ものぞ、教職何ものぞ、人望何ものぞ、この四つのものがあつて此世は既に天國である、爾うして謙遜と誠實と勤勉とを以てこの四つのものを得るは難くない、感謝すべきかな。（三八、六）

無爲の五週間　余は病のために五週間の長日月を無爲の間に過せり、獨り思ふ余は長時間を無益に消費せりと、然れども余は此間に著しき愛の表顯を目擊せり、余は余の友人醫師某が百里の道を遠しとせず雪を侵して余を訪はんとて來りしを見たり、余はまた或る地方の無牧の小教會が余のために數日に渉る祈禱會を開きしを聞けり、教友の或る一小團體が白雪皚々たる上に晴夜に余のために天に叫べるを知れり、取るに足らざる余も病に罹りてより多くの愛の受領者となれり、余は病褥に在りて夢に天の扉の余の前に開かれて聖徒の其中に座するを見ざりき、然れども余は余の肉眼を以て地上に愛の天國の既に建設せられつゝあるを目擊せり、無爲の五週間はまた默示の五週間なりき、余は病癒えて後に目に天國を見しの感を懷けり。（三九、三）

新教會　監督なし、牧師なし、傳道師なし、憲法なし、洗禮なし、聖餐式なし、按手禮なし、樂器と教壇とを備へたる教會なし、神あり、キリストあり、聖靈あり、神と人とを愛する心あり、其教會堂は上に蒼穹を張り、下に青草を布きたる天然なり、其禮拜式は日々の勞働なり、其音樂は聖靈に感じたる時の感謝の祈禱なり、其憲法は聖書なり、其監督はキリストなり、而して其會員は靈と眞とを以て神を拜する世界萬國の兄弟姉妹なり、我等は永久に斯教會に忠實なる會員たらんと欲す。（三九、四）

教會と天國　教會は現世の天國にあらず、天國は來世の教會にあらず、天國は教會の中にあり、又其外にあり、教會失すると同時に天國は失せず、然かり、多くの場合に於ては教會失せて後に始めて天國現はる、

我等は必ず天國の市民たるを要す、必しも教會の會員たるを要せず、神の天國は廣し、我等天國に入らんと欲して必しも教會に入るの要なきなり。（三九、四）

天國の建設　天國は今之を身の外に求むる能はず、然れども之を心の衷に建つるを得べし、キリストの愛を以て自由に人の罪を赦して我は我が心より憎惡憤怨の苦きを去り、立ろに其處に平和の天國を建つるを得るなり、天國は無限の宥恕の行はるゝ所なり、キリストの愛を以てして罪の世に在る今日と雖も我等は容易に我等の衷に天國を建設し得るなり。（三九、九）

新教會の出顯　教會の上に教會あり、羅馬天主教會の上にルーテル、カルビン、ウエスレー等の教派的教會あり、教派的教會の上に無教會なかるべからず、無教會は愛の法則の外に何等の法則をも認めざる教會なり、而して斯る教會が最善最美の教會なるは言を俟たずして明か

なり God is marching on（神は進みつゝあり）、我等は此新世紀と新興國とに於て詩人と預言者とが理想せし新教會の出顯を努めざるべからず。（三九、一一）

初夢　恩惠の露、富士山頂に降り、滴りて其麓を霑し、溢れて東西の二流となり、其西なる者は海を渡り、長白山を洗ひ、崑崙山を浸し、天山、ヒマラヤの麓に灌漑ぎ、ユダの荒野に到りて盡きぬ、其東なる者は大洋を横斷し、ロッキーの麓に黄金崇拜の火を滅し、ミシシピ、ハドソンの岸に神の聖殿を潔め、大西洋の水に合して消えぬ、アルプスの嶺は之を見て曙の星と共に聲を放ちて謠ひ、サハラの沙漠は喜びて蕃紅の花の如くに咲き、斯くて水の大洋を覆ふが如くエホバを知るの知識全地に充ち、此世の王國は化してキリストの王國となれり、我は睡眠より覺め獨り大聲に呼はりて曰く、アーメン、然かあれ、聖旨の天に成る如く地にも成らせ給へと。（四〇、一）

天國の自設　人に愛せられんと欲する莫れ、唯愛せよ、嫌はるゝも愛せよ、憎まるゝも愛せよ、十字架の上よりも愛せよ、愛するは愛せらるるよりも幸福なり、我等は愛せられんと欲するも愛せられず、然れども愛するは我等の自由なり、我等は進んですべての人を愛し、自から己のために天國を作るべきなり。（四〇、一）

理と情　理あり、情あり、情は理を打消す能はず、理は情に勝つ能はず、理は永世を信じて動かず、情は永別を惜しんで泣く、理は望み、情は歎く、理は諭し、情は狂ふ、人の二元性は最も著しく死に際會して顯るゝが如し。

然らば理は天なる乎、情は地なる乎、理は父なる乎、情は母なる乎、理は強くして情は弱し、理は猛くして情は麗し、嗚呼、我は人なり、天使にあらず、我は地の產なり、故に涙の子なり、我が泣くは我が故鄕なる地を愛して

アヽ神よ、地を救ひ給へ、我は地を離れたる天を望まず、復興せる天地を望む、即ち理と情との合する所、涙泉の固渴する所にはあらで、其淨めらるゝ所、詩人の夢想せる永久に女らしき所、天にもあらず、去りとて又地にもあらず、天と地との合せし所、嗚呼、我は彼所に我父と再び相會せんと欲す。父の永眠の後に誌す（四〇、五）

夏の午後　風戰ぎ枝躍る、猫眠り子供遊ぶ、地は平靜なり、我が心亦平靜なり、我は既に聖き國に在り。（四〇、八）

キリストの王國　此世の諸の國は我等の主イエスキリストの屬となり、キリスト世々窮なく之を治め給はん時に、陸には兵營絕えて犂の聲は揚らざるべく、海には軍艦失せて黑煙天に漲らざるべし、山は森林を以て蔽はれ、河は其岸を溢れず、肥料は豐かに供給されて民は凶斂を歎かざるべし、人は衣食足りて其隣人を羨まず、人生は樂しきものとなりて、死と墓とは忘らる、軍人は醫師と化して病毒と戰ひ、稅吏は巡視

と成りて民に慰藉を頒つ、嗚呼慕はしきかなキリストの王國、我は其到來の一日も、迅速からんことを願ふ。默示錄十一章十五節(四一、一)

現世の樂しき所以　現世其物は樂しからず、來世の希望あるが故に樂し、恰かも富の獲得の希望ありて貧は苦しからざるが如し、現世は修羅の街なり、然れども自我を平和の來世に移して現世の苦鬪は却て歡樂たるに至る、**我等は希望に由て救はるゝなり**、即ち來世の希望の快感に由つて現世の苦痛より免かるゝを得るなり。羅馬書八章二十四節。(四一、三)

來世と向上　來世の希望は迷信にあらず、又妄慾にあらず、來世の希望は無窮發達の希望なり、不滅なるべき人類の懷くべき正當の希望なり、此希望にして無からん乎、人は禽獸と何の異なる所なき者なり、**人の魂は上に昇り、獸の魂は地に降る**、人に永久の向上性あるが故に彼は永生を望んで息まざるなり、彼に來世なしと說くは彼に自殺を勸むるに等し、來世の希望を懷きて而已、人は人らしき者と成るを得るなり。傳道之書三章廿一節。(四一、三)

來世を說かざる宗教家　今や來世を說かざる宗教家多し、彼等は言ふ、天國は淸められたる現世に外ならずと、然るに事實は彼等の言に反し、現世の汚濁は日々に益々甚だし、來世の希望を供せずして現世は之を淸むる能はず、宗教家にして來世を說かざらん乎、彼等は何に由て現世を淸めんとする乎、來世の確信なき宗教家は鹹味を失ひたる鹽なり、**後は用なし、外に棄られて人に踐まれん而已。**馬太傳五章十三節(四一、三)

不滅の獲得　我は人の靈魂は何人のそれも不滅なるや否やを知らず、然れどもキリストに在る靈魂の必ず不滅なるを知る、靈魂不滅は學理的に說明する能はず、信仰的に實驗するを得べし、我等は苦んで、鬪て、自己に死して、不滅を我が有となすべき也。(四一、三)

不朽の我等　我等は既に永生を有す、故に歳と共に老ひず、**我等の外なる人は壊るとも内なる人は日々に新たなり**、我等が死して死せざるは是れが故なり、我等はキリストに在りて既に死より生に移されたればなり、春は來り春は去る、然れども我等の靈は永久の春なり、縱し天は去り、地は焚盡くされんも、キリストに在る我等は不朽の神と共に存すべし。哥林多後書四章十六節。（四一、三）

聖國の到來　世は進みつゝあるや我は知らず、退きつゝあるや我は知らず、平和は來りつゝあるや我は知らず、戰爭は起りつゝあるや我は知らず、我は唯一事を知る、神の聖國の日々刻々近づきつゝあることを、而してその政治家、軍人、宗教家等、人の運動に由て來る者にあらざる事を。馬太傳二十四章六節參考（四一、四）

父の一周期に際して　父の一周期は周來れり、我に涙なき能はず。

彼れ今何處に在る乎、彼は消滅せし乎、我は爾か信ずる能はず、彼は彼の墓に眠る乎、我は爾か信ずる能はず、然らば彼れ今何處に在る乎。

彼は我と共に在り、我が側に在り、我が裏に在り、我は我が五感を以て彼を感ずる能はざる而已、我に第六感又は第七感の供せられん時、我は明かに再たび彼を感ずるを得ん、彼は今尚ほ我と共に在り、我を勵まし、我を慰め、我と苦樂を頒ちつゝあり。

想見る復活の曙、此壊つるもの壊ちざるものを衣、死ぬるもの死なざるものを衣ん時、我等は面と面とを合はして人生の苦鬪と勝利とを語らん。

我れ天より聲ありて我に言ふを聞けり、曰く、今より後、主に在りて死ぬる人は福ひなりと。默示錄十四章十三節。（四一、四）

天國とは何ぞ　天國とは何處の事でもない、人が人を愛する所である、人が人を愛しない所は、其他の事は如何であらうが、其所は天國で

はない、音樂があらうが、說敎があらうが、熱信があらうが、慈善が行はれやうが、其處は天國ではない、天國を作るのは誠に易い、自己を棄て人を愛すればそれで天國は即坐に成就るのである、何にも特別に敎會を組織するの必要はない、何にも特別に神學論を鬪はすの必要はない、人がキリストに倣て人を愛すれば、夫れて天國は成就るのである、斯くも易きことを爲さないで、論じたり計圖んだり、奔走したりする人々の愚かさよ、聖國を臨らせ給へ、然り、我等をして人を愛さしめ給へ、而して今日直に、此罪の世に在て、天國を出現せしめ給へ。（四一、五）

敎會と神の國　敎會を廢すべし、而して之に代へて神の國を建つべし、敎會は人の作る者、神の國は神の建て給ふ者なり、神の國に敎會に於けるが如く人の自由を縛るの信仰箇條あるなし、人の上に立て之を役人的に支配する監督、牧師、執事、傳道師等あるなし、神の國は愛の團體なり、神を父として戴く家族なり、余輩は敎會を排斥す、然れども鹿の溪

水を慕ひ喘ぐが如くに神の國を戀ひ慕ふ。（四一、一二）

幸福なる生涯　人あるを知らず、神あるを知るのみ、明日あるを知らず、今日あるを知るのみ、何の計畫をも立てず、唯全力を盡して手に來ることを爲す、斯くして歲は始まり、歲は終る、我は知る、我は此世よりして既に永生を享樂しつゝあるを。（四二、二）

來世の信仰　我は來らんとする世の存在を信ず、之を信じて歡び且つ自から慰む、我は來世を獲んがために現世に於て善を爲さず、然れども現世に於て少しく苦んで善を爲すを得て、來世の在るを聞て喜ぶなり、彼處にすべての涙は拭はるべし、彼處に愛する者の再會はあるべし、彼處に花は悲歎に伴はれずして開くべし、彼處に我等は萬物の主たるべし、來世の信仰は春の夜の夢の如くに我に臨む、我は之に科學的證明を供する能はずと雖も、我れ之を信じて我が心は安し、之を望んで歌は我が唇にあり。（四二、五）

此彼勝敗の理　此世の勝敗は競爭に由て決し、天國の優劣は恩惠に由て定まる、此世に在りては强き者は勝ち弱き者は敗れ、智き者は優り、愚かなる者は劣る、然れども天國に在りては欲ふ者にも趨る者にも由らず、唯惠む所の神に由る（羅馬書九章十二節）此世の法則は天國の法則に非ず、我等此世に於て敗るゝとも敢て悲むに足らず、蓋し此世に於て敗るゝ其理由は天國に於て勝つ其理由たるべければ也。（四三、四）

天國の正門　イエス曰ひ給ひけるは

誠に實に汝等に告げん、羊牢に入るに門よりせずして他より踰る者は竊盜なり强盜なり……我は門なり、若し人我より入らば救はるべし

と、イエスより入らずして彼に關する教義よりし、又彼の名を藉りて立てられし教會よりし、其他イエス御自身以外の人又は物、又は說、又は制

度よりして父の國に入らんとする者はすべて竊盜なり又は强盜なり、彼等は皆な正門よりせずして垣を踰へ、塀を破りて入らんとする者にして、外の幽暗に逐出さるべき者なり、恨む、余輩も亦無智の結果、屢々此不法の行爲に出て、父の家に入る能はずして、長く外界の幽暗に彷徨ひしことを。（約翰傳十章一、九節。（四三、八））

幸不幸　永生の希望なくして最も幸福なる生涯も憐むべき生涯なり、永生の希望ありて最も不幸なる生涯も羨むべき生涯なり、生涯の幸不幸は此希望の有無に由て定まる、其他のものゝ有無に就ては敢て言を費すの要なきなり。（四三、九）

我が教へ得ること　我は社會の改良を說かず、國家の隆興を語らず、個人の榮進を教へず、家庭の快樂を傳へず、天國の榮光を說く、キリストに由て得らるべき永生を傳ふ、之を得んと欲する者は我に來るべし、之れ以外のものを得んと欲する者は我に來るべからざる也。（四三、九）

恩惠

感謝の念 神の既に下し給ひにし恩惠に就て感謝せよ、然らば神は更に新なる恩惠を下し給はん、舊恩に就て感謝せずして新恩に與かる能はず、かの不平家と稱する徒が終生滿足を感じ得ざるは彼が感謝の念に於て缺くる所あればなり。（三四、一）

感謝 神に感謝す、嗚呼神に感謝す、神は我に多くの艱難を下し給ひしを、我れ食を以て貧者を養はんとせしが故に神は我を貧に陷れて我をして饑餓に泣かしめ給へり、我れ國を救はんとせしが故に神は國人を驅て我に逆はしめ、我に蒙らするに國賊の名を以てせしめ給へり我れ社會を改良せんとせしが故に多くの僞の兄弟を我に送つて我の社會的事業を破碎せしめ給へり、神は我を其福音の爲に備へ給へり、故に彼は我れが我が業に就くまでは我に平安を賜はざりし、今に至て我は知る、我に臨みし饑餓の難、迫害の難、僞りの兄弟の難は皆な幸福の道に我を驅逐するための恩惠の鞭撻なりし事を。（三五、三）

至高の愛 余は生れながらにして暗きを好む者なり、然るに神は余をして彼の光明の一端を仰ぐを得さしめ給へり、余は生れながらにして死に傾く者なり、然るに神は余をして生命に向ふを得さしめ給へり神は余の意嚮如何に關らず余を救はんとし給ひつゝあり、神の愛の人の愛よりも高きは實に天の地より高きよりも高し。（三五、五）

希望の土臺 余は余が福音の宣傳者にして商人又は官吏ならざるの故を以て神の救濟に與からんとは思はず、余にして若し幸に救はるゝを得ば是れ單に神の恩寵に由てなり、余の職業、余の品性、余の行働余の階級、余の學問等は余の救濟に何の干はる所あるなし、余は余の救濟の希望を單に神の無限の愛に置く者なり。（三五、五）

神助 神を信ぜよ、去らば神は汝の必要に應じて凡ての善き物を

以て汝を惠まん、或は天來の思想を以て、或は外來の友人を以て、或は意はざるに汝に臨む凡ての恩惠の手段を以て、彼は汝の事業を輔けん、汝の目下の境遇を以て汝の力を量る勿れ、汝は信仰を以て神の力を汝の力と爲すを得べし、多くを望めよ、蓋天に在す汝の父は其恩惠の寶庫を開いて、汝の來て之を求めんことを待ちつゝ在り給へばなり。（三五、六）

幸福なる我れ　我が敵は我を苦めんとし、我が神は我が敵を以て我を惠まんとす、我が敵の謀計は凡て我を導くの攝理と化し、我は彼等に憎まれて却て幸福なる者となる、實に萬事を神に任したる我は幸福なる者なり。（三五、九）

患難と恩惠　患難は恩惠を離れて考ふべからず、そは患難は恩惠の一部分なればなり、鹹味を和せずして甘味は甘味ならず、患難なくして恩惠は恩惠ならず、食に藥味の必要なるが如くに人生に患難は必要なり、患難ありて始めて人生に香味は生ずるなり。（三五、一二）

無理の要求　人、汝に無理を要求する時に汝、喜んで之に應ぜよ、蓋人が汝に無理を要求する時に神は恩惠を以て汝に逼りつゝあり給へばなり、キリスト信徒に迫害多きは彼に恩惠多きが故なり、世が彼より普通以上の道德を要求するは彼に普通以上の恩惠の加はらんためなり、敵の聲は神の聲なり、嘲罵凌辱の聲は之を譯すれば恩惠慈愛の語なり、吾等は新しき心と共に新しき耳の吾等に與へられんことを神に祈らざるべからず。（三五、一二）

手段と目的　患難のための恩惠にあらず、恩惠のための患難なり、患難は手段にして恩惠は目的なり、患難を以て始まり恩惠を以て終るなり、一の患難は百の恩惠を招き、短き此患難の世は永遠無窮の恩惠の世に終る、故に我等は恩惠に就て思ふこと常にして患難に就て考ふること稀れならざるべからず、そは神の造化に於ては患難は其最小部分に過ぎざればなり。（三五、一二）

歳末の感謝

歳將に暮れんとす、アヽ我が神よ、我は重ねて爾に感謝す。

我は今年も亦多少の熱き涙を流したり、人の知らざる多少の苦き杯を飲みたり、然れども爾は我を棄て給はずして我に爾の業を爲さしめ、弱き我に由て爾の福音を說き給へり、爾は又此小なる雜誌を持續するを得さしめ、爾の聖書を我國に廣めしめ給へり、斯くて汝の恩惠に由りて我は亦無益に此歳を過さゞりし、我に取ては今年も亦勝利の一年なりし。

爾は亦此歳我に爾の聖旨に就て多く示し給へり、我は更に傳道の決心を堅うせり、我はより多く我を憎む者のために祈るを得たり、我は主の歡喜に充たされて喜んで我が敵の要求に應ずるを得たり、我は亦た更らにキリストに對する我が信を堅うせり、我は「批評」なる者を懼れずなりぬ、我は聖書に示されたる救拯の眞理の人智以上に立つ者なるを悟

るを得ぬ、我の迷霧の滅退すると同時に我の確信は增進しぬ、我は去年の終に比して今年の終の我に取ては著しく幸福なる者なるを感ず。

神は亦此歳我に新しき多くの兄弟姉妹を與へ給ひぬ、此扶助なき我を使役し給ひて多くの貴き靈魂を彼の寶庫に收穫れ給ひぬ、數十百萬の富と數十百人の敎役者とを使用する傳道會社に勝る事業を此孤獨賴邊なき我に遂ぐるを得さしめ給へぬ、北見の北端より臺灣の南端に至るまで、太平洋の東岸にコロムビヤ、フレーザーの兩大河が其源を發する所より、其西岸に於て楊子江の大河が洋々として東に向て流るゝ邊に至るまで爾は我に祈禱の友を與へ給ひぬ、我は今は孤獨の人に非ず、時針午後の七時を告る時は、二千有餘の靈の兄弟は一齊に爾の前に跪いて相互のために祈るなり、世の學者は我等の愚を嗤ふならん、然れども祈禱は此世に於て大事をなせるを我等は知る、太平洋の兩岸に跨がる二千有餘の祈禱の聲が天に達せざるの理由あらんや。

歳將さに暮れんとす、アヽ我が神よ、我は爾に感謝するのみにして他に願ふ所あるなし、爾は我に我等の祈願に勝りたる恩惠を與へ給へり、我が感謝の杯は溢るゝなり、我は永久にエホバの殿に住まん。アーメン

（三五、一二）

我の富

金と銀とは我に有るなし、然れども我は貧しき者に非ず。我は第一にエホバの神を有す、我は晝となく夜となく彼に就て思ふ、彼の我を責むるあり、彼の我を宥むるあり、彼の我を教ふるあり、彼の我を鞭つあり、我は寸刻も彼を離れず、善を爲す時も、愆て罪を犯す時も、學ぶ時も、教ふる時も、彼は我と偕にあり、我も亦彼を慕ふなり。我は第二に我が救主として、兄弟として、同情者として、友人として、イエスキリストを有す、彼れは見えざる神の形像にして、人類の理想の事實となりて顯はれし者なり、彼を識ることは人生を識ることとなり、歴史は彼に於て中心し、人生の意義は彼に依て解せらるゝイエスを識るは最大

智識を得しことなり、彼を友として持て無意味なる日とては一日もなきなり、山なす富を以てするもイエスが我等の心に供する寸時の快樂をも得る能はず。

我は第三に聖書を有す、是れ亦た知識の無盡藏なり、我れ艱める時には四福音書と默示錄とを讀むなり、我れ喜ぶ時には雅歌を讀むなり、國難に際する時にはイザヤ、エレミヤ等の豫言書を讀むなり、信仰の衰へし時には保羅の書翰を讀むなり、心靜かなる時にはヨブの書を讀むて人生哲學を稽へ、箴言を讀んで處世の術を探るなり、怒る時も、泣く時も、喜ぶ時も、悲む時も、我は此書に行くなり、我は此書を有たざる人を甚だ憐れむなり。

我は第四に我天職と信ずる一つの事業を有す、是れ神が特別に我に與へ給ひし事業にして他の人が之を眞似んと欲するも得ず、又我に代て之を爲さんと欲するも得ざるなり、我が特殊の事業なるが故に之に世

の所謂る競爭なるものゝ附隨するあるなし、我は之に據て天下に闊步し、或る特別の目的を以て此世に生存す、人の最大發見物は彼の天職なり、之を知らずして彼の生涯は無意味なり、我は幸にして之を發見したりと信ず(神の恩惠に依て)、故に我は非常に喜び、總ての苦痛を忘れて之に從事するなり、人は勞働は苦勞なりと云へども、我に取ては勞働は快樂の極なり、我は金錢の報酬なくとも之に從事するを得るなり、我が今世に於ける最大の快樂は我が日毎の勞働なり。

我は第五に多くの善き友人を有す、彼等は利益の友に非ず、學問の友に非ず、亦た必しも主義の友に非ず、彼等は信仰の友にして神と救主と希望と艱難と歡喜とを偕にする者なり、我に若し我が屬する敎會ありと言はんには人或は我が誠實を疑ふものあらん、然れども無敎會主義を執る我にも亦大なる敎會あるなり、其會員としてはアウガスチンあり、ダンテあり、ルーテルあり、コロムウエルあり、是れ實に聖徒の交際にして基督の唯一の敎會なり、我は獨り此世に在て戰ふに非ず、我は五大洲に跨がるキリストの敎會の一員として戰ふなり、我の眞正の兄弟姉妹は我が聲を知る、我も亦彼等の聲を知る、而してキリストの愛の律法の外に何の信條も紀律も我等を縛るなく、我等は唯心靈の奧殿に於てキリストに在て互に相愛するなり、孤獨なるが如くに見える我は天空の星よりも數多くの友人を有す、此他更らに神を信ずる家庭あるなり、饑餓を充たすに足るの糧あるなり、而して總てを冠するに永生の希望あるなり、我は實に「王の子」なり、世の富者にして我に勝るの富者あらんや。

(三六、一)

慰藉と奬勵

我儕神に依て事を爲さんとするや、神は我儕各自を慰めて曰ひ給ふ、**我れ汝を離れず、汝を棄てず、心を强くし且つ勇め、汝の凡て往く處に汝の神偕に在せば懼るゝ勿れ戰慄なかれ**と(約書亞書一章)、此援助ありて戰陣に立つ、我儕何人をか懼れん、何事にか戰慄かん。

(三、六、二)

絶對的從順　人我を責むる時には、神我を助け給ふ、人、我に無理を要求する時には神、我に之に應じて尙ほ餘りあるの恩惠を下し給ふ、神が我に絶對的從順を命じ給ふは之に由て我に彼の大能を顯はし給はんがためなり、故に我は聖書の言辭其儘を服膺し、人、我が右の頰を批たば喜んで亦ほかの頰をも轉らして之に向け、一里の公役を强ひなば感謝して之と偕に二里行くべきなり(馬太傳五章四十、四十一節)。(三、六、三)

公然の秘密　我等普通の邦文を以て基督の福音を說く、而かも之を解し得る者は邦人にして佛文又は獨逸文を解し得る者よりも多からず、我儕の說くキリストは多くは釋迦又は孔子の更らに大なる者として解せられ、我儕の論ずる正義は山陽又は東湖の論ぜしものゝ稍々少しく高尙なる者として解せらる、世はキリストを知らず、故にキリストの福音を解するに方ても世の標準を以てしてクリスチャンの立場より爲さず、茲に於てか我儕は知る、我儕は隱語を語る者なる事を、我等の使用する言語は簡易也、然れども我等の語る事實は秘密なり、我等の簡易なる文章に籠る事實を悟り得る者は我等と偕にキリストの救罪の恩惠に與かるを得し少數者のみ。(三、六、四)

クリスチャンたる事　クリスチャンとなることは我儕が好んで成れるとてはない、クリスチャンは神の特別の創造である、故に之になるを得て我儕はたゞ神に感謝するのみである、我儕は自から勉めて世の謂ふ所の義人となるとは出來る、然しながら神の義人たるクリスチャンとなるとは是れ人間の力量以上の事である、爾うして此事はクリスチャンと成つた者のみが知ることの出來る事である。(三、六、八)

休養の目的　休養は第一に肉體を休めることである、爾うして是れ或る場合に於ては神と肉體とに對して吾儕の盡すべき大なる義務である。

休養は第二に過去の恩惠を想ひ起し、新たに之を記憶に留める事である、吾儕は絶へず新らしき恩惠をのみ要求して居つてはならない、吾儕は度々舊き恩惠を回想し、吾儕の記憶の中に喜ばしき恩惠の財産目錄を作るやうに努めなければならない、舊きを回想するのは新らしきを惹起すための最も良き方法である、神は舊きを忘るゝ者に限りなく新らしきものを加へ給はない。

休養は第三に直接に神の援助に與かることである、絶へず働いて(實は働かさしめられて)神の恩惠に與かる者は終には勞働其物が吾儕の神ではあるまい乎と疑ふやうに成る場合がある、故に吾儕は度々勞働を廢して、神御自身が吾儕を援け給ふ者であつて、勞働が吾儕を援けるのでない事を學ばなければならない、蓄積あつての休養ではない、神の無量の恩寵を實驗するための安息である、聞く神は安息日の前には二倍のマナをイスラエルの民の上に降らし給へりと(出埃及記十六章廿二—卅一節)、吾儕もまた今日吾儕の業を廢して神の此恩惠を實驗すべきである。

*　*　*　*　*　*

勞働も神の賜物である、休養も神の賜物である、吾儕は感謝と信仰とを以て二者孰れをも受くべきである。(三六、八)

神恩　神は或者には富と位とを與へ給ふ、又或者には智慧と知識とを與へ給ふ、又或者には幸福なる家庭と無事の生涯とを與へ給ふ、又或る他の者には艱難と迫害と貧苦と裸程と窮困とを聖靈の歡喜と偕に與へ給ふ、其榮の富に循ひ各人に其善と視給ふ所のものを下し給ふ、我儕此世に在て不幸と稱せらるゝ者も亦深く神に感謝すべきである。(三六、八)

神の教育法　神は我に敵人を送り給ひて我が身に危害を加へしめ給へり、神は亦我にキリストの義と愛とを示し給ひて我に此危害に

勝つの途を教へ給へり、危害の我が身に加へられざりしならん乎、我は我が神の愛を識ると能はざりしならん、敵人の惡意は神の好意を招くの機會となれり、神は實驗的に其聖旨を我等に傳へ給ふ、敵人の奸計、憤怒、憎惡を通うして我は我が神の愛を味ひ得たり、感謝すべきかな。(三六、九)

余の求むるもの　余は神より嘉き「物」よりも良き「心」を得たく欲ふ爾うして神は彼に祈て善き「物」を賜はないことはあるが、希ふて良き心を下し給はないとはない、清き心、柔和なる心、矜恤ある心、饑渴く如く義を慕ふ心、是等は皆な金銀、寶石、土地、家屋に優さる數層倍の善き賜物である、爾うして我等は幾度となく神より斯かる善き賜物を獲て彼の存在を疑はんと欲するも得ないのである。(三六、一一)

悲痛と歡喜　我儕に悲痛あり、亦歡喜あり、悲痛は身の悲痛にして歡喜は靈の歡喜なり、而して靈の歡喜の身の悲痛に較べて優かに廣且大なるが故に我儕は歡喜の人にして悲痛の人にあらざるなり、キリストに在る我儕の歡喜は一切の悲痛を去り得て餘りあり、神は我儕の悲痛を減じ給はず、然れども我儕の歡喜を增して悲痛を無きが如きものと爲さしめ給ふ。(三六、一二)

我の新年　人は新裳に誇り、我は新生を悅ぶ、人は戰鬪を畫し、我は傳道を企つ、人は暗澹の彼方に勝利の功名を望み、我は光明の中に平和の春を樂む、我は**我儕をして、我主イエスキリストに由りて勝を得しむる神に感謝す。**　哥林多前書十五章五十七節。(三七、一)

新年の歡喜　我に大なる歡喜あり、世は之を我より奪ふ能はず、我は亦好んで之を人に頒つ能はず、そは是れ神が我に下し給ひし特別の恩賜なればなり、世は勿論其何物なる乎を知らず、神より同一の恩賜に與かりし者のみ其何物なる乎を知る、是れ聖靈の恩賜なり、神が人類に賜ふ最善最美の恩賜なり、之に優りて貴きもの全宇宙にあるなし、之を賜はりて我儕は他に何の要求むるものなきに至る、是れありて我儕は

足れり、是れを心に受けて我儕は凡の苦痛を忘る、此恩賜に接して我儕は神は全然愛なるを知る、此恩恵に與からんがためには我儕は如何なる困苦に遭ふも可なり、今に至つて我は始めて知る、**天にあるもの、地にあるもの、或は高き、或は深き、或は今ある者或は後にある者、其他何物も我儕を我主イエスキリストに頼れる神の愛より絶らすること能はざるを。**（羅馬書八章末節。（三七、一）

敵の前の筵　**神は我が敵の前に我がために筵を設け給へり**（詩篇二十三篇）彼は我がために言論を以て我を辯護し給はざりし、否な、我を、して默す羊の如くに我が敵の前に口を噤がしめ給へり、然れども神は我に恩恵を下して我が敵の前に我を義とし給へり、神の議論は言語にあらず、威力にあらず、靜かにして永く續く恩恵なり、蹈まれて後に榮を受くる者は神の人なり、擧げられて後に恥に沈む者は罪の人なり、神の裁判は期を待て來る、我儕は千百年後の神の審判を待つ者なり。（三七、

二）半百號の感謝

感謝す、此小誌、本號を以て其第半百號に達す、長壽、勿論余輩の目的に非ず、余輩は唯生命のあらん限り善事を爲さんと欲するのみ、過去に於ける神の指導を追想して、余輩は將來に於ける更らに大なる恩寵を信じて疑はず。（三七、三）

安息日　義務の日ではありません、感謝の日であります、感恩の日であります、神が今日まで我等のために爲し給ひし總ての善きことを記憶するための日であります、我等は之を憶へて歡びます、我等は斯かる神が永久に我等を捨て給はざるを想ふて勇みます、安息日は止息の日ではありません、進歩のために新らしき活力を蓄ふるための日であります、歡喜と希望と祈禱との日であります。（三七、四）

驚くべき平凡の理　惡人の成功は彼を滅亡に導き、善人の失敗は彼を救濟に連れ行く、是れは平凡の理であつて、今更ら之を繰返すの、

要はないと言ふ人もあらうが、然かし余輩は歳を重ぬる毎に此理の着々として余輩の生涯に事實となりて顯はれ來るを視て實に感謝に堪えないのである、成功、何ものぞ、是れ善心を懷くことである、失敗何ものぞ、是れ惡意を蓄へながら、計策を以て僅かに表面の美を飾り、眼を人生の大局に注がずして其局部に於てのみ、暫時的の小勝利を制めんとすることである、正義は實に誠に、最終の勝利者である、駭くべきかな、感謝すべきかな。（三七、五）

幸福なる基督信者

出されて重荷を負はせらる、幸福なるは基督信者なり、彼は餘りに多く神に惠まるゝ者なるが故に、世は彼の幸運を妬んで寸刻も彼に休息を與へんと欲せず、凡ての手段を盡して彼の生涯を辛慘ならしむ、而かも彼には世の知らざる休息のあるあり、故に彼は羊の如くに默して世の爲すが儘に從ふ、幸福なるは實に基督信者なり。（三七、八）

第五年期に入る

幾度か終刊ならんとし、幾度か發刊せり、而て今や亦第五年期に入る、此誌は之れ吾人の業にあらず、「或者」が吾人の手を執て作り給ふなり、吾人は謹んで更に其聖旨に從はんと欲す。（三七、一一）

恩寵の徵

苦痛の中に生れ、苦痛の中に持續す、幾度か殘れんとして未だ殘れず、內より外より扶けられて其使命を全ふす、斯かる場合に在ては成効は確かに天佑の徵なり、吾人は本誌の經歷に鑑みて神の恩寵を疑はんと欲するも得ず。（三七、一一）

實歷の福音

非基督教國に於て純然たる基督教的雜誌を發刊す、而かも世の勢力の何の賴むべきなく、奇跡の是に伴ふなからん乎、如何にして其存在を持續するを得んや、本誌が傳へし最も善き福音は本誌の存在其物なり、多くの艱難の中に道を傳へし此誌の實歷は此誌が失せて後も永く多くの人を勵まさん。（三七、一一）

恩惠と責任

神の恩惠は責任に伴うて來る、重き責任に大なる恩

惠伴ひ、輕き責任に小なる恩惠伴ふ、大なる恩惠に接せんと欲するか、大なる責任を擔へよ、責任を免れて恩惠に接せんとするは神を欺かんとするなり、**自ら欺く勿れ、神は慢るべきものにあらず**、(加拉太書六章七節)如何なる智者と雖も責任を排斥して神より恩惠を竊取する能はず。(三七、一二)

新年の誓　**我れエホバを大に喜び我靈魂は我が神を樂まん、そは彼れ我に拯救の衣を着せ義の外服を纏はせ、新郎が冠を戴き新婦が玉と金との飾を着くるが如くなし給へばなり**(以賽亞書六十一章十節)、我は今年も亦絶えず感謝の供物を我エホバの神に献げん。(三八、一)

我意と神意の衝突　我は恒に我が力の足らざらんことを懼れ神は恒に我が力の足り過ぎんことを慮り給ふ、我は我れ强からざれば弱しと思ひ、神は我れ弱からざれば强からざるを知り給ふ、我は我が力を增さんと欲し、神は我が力を殺がんと欲し給ふ、我が意ふ所は常に神

の見る所と異なる、我の焦慮する時に神は笑ひ給ふ、我は己を知らずして恒に自から苦惱む者なり。(三八、一〇)

限りなき惠み　詩篇第百七篇

歡喜を以て主を讃美せよ、**そは彼の惠みに限りなければなり**、萬事を彼に任かし奉れよ、**そは彼の惠みに限りなければなり**、彼は我等のすべての敵を服へ給へり、**彼の惠みに限りなければなり**、彼は我等に多くの善き友を與へ給へり、**彼の惠みに限りなければなり**、彼に由りて我等の生涯は勝利の生涯なりし、**彼の惠みに限りなければなり**、我等は終に安然に眠るを得ん、**彼の惠みに限りなければなり**、我等は覺めて主の聖國に永遠の春を樂しむを得ん、**彼の惠みに限りなければなり**、彼の惠みに限りなきが故に、我が世に在らん限りは、又世を去りて後も、其恩惠と憐憫とは我に添ひ來らん。(三九、一〇)

必要物の供給　我等に必要のものは必ず與へらるべし、然かも前

以て與へられず、必要の時に與へらるべし、故に我等は要なき物を要なき時に祈求めて主たる我等の神を試むべからず(馬太傳四章七節)、神は**最と近き助けなり**(詩篇四十六篇一節)、我等は一呼して其援助に與かるを得べし、父の物を己れに貯ふるにあらざれば不安を懷くが如きは子たる者の道にあらず。(三九、一一)

恩惠の代價　神は無代價に恩惠を人に下し給ふ、然れども人は代價を拂はずして其恩惠を己が有となす能はず、多く拂ふ者は多くを得少く拂ふ者は少くを得富者其所有の萬分の一を捧げて恩惠の萬分の一を得、貧婦其有てるすべてを抛ちて恩惠のすべてを得たり(路加傳廿一章一、二節)、是れ神の吝嗇なるが故にあらず、宇宙の法則なれば也、福音を恥とする者は終生福音を耳にするも福音の恩惠に與かる能はず、福音のために命を捐つる者にして始めて悉く福音の恩惠を享有するを得べし、**神はまことに慢るべき者に非ず**、加拉太書六章七節)、多く拂ふ者は多く得、少く拂ふ者は少く得、我等は神を怨むべからず、己を責むべし己れが得んと欲せざりしが故に得る能はざりしを認むべし。(三九、一一)

何の得し所ぞ　我れ基督教を信じて何の得し所ぞ、不孝の子として家人に斥けられ、不忠の臣として國人に憎まれ、不信の徒として教會に厭はる、窮乏の裡に一生を送り、名譽榮達の身に臨むなし、我れ之を思ふて心衷に沈む、豫言者エレミヤと共に叫んで曰ふ、**ヱホバよ汝、我を欺けり、我れ汝に欺かれたり**と(耶利米亞記二十章七節英譯に由る)。然り我れ基督教を信じて何の得る處なかりき、唯一物を獲たり、イエスキリスト是れなり、神の完全なる者、**萬物を以て萬物に滿たしむる者の滿てる所の者**、成(就)されたる義、道德的宇宙、然り、我は基督教を信じて之を獲たり、之を獲て我れ亦何をか要せん、我はパウロと偕に叫ばんのみ

その言ひ盡されぬ神の賜物に因りて我れ神に感謝する也と。　哥林多後書九章十五節。(四〇、二)

感謝と祈禱　歡べよ、感謝せよ、而して更らに大なる恩惠を仰げよ　感謝は有効なる祈禱の要素なり、神は感謝なき祈禱に其耳を傾け給はず、**夫れ有てる者は予へられて尙ほ餘りあり、有たぬ者はその有てるものをも奪はるる也**、感謝は「有てる」を證明す、感謝するものは恩惠の上に更らに恩惠を加へらるべし、我等は聖父の前に貧困を訴へて彼の憐愍を乞はんと欲すべからず、寧ろ富有を陳べて恩惠の加增に與からんと欲すべし。馬太傳十三章十二節。（四〇、四）

神の助　神は種々の方法を以て我等を助け給ふ、或ひは靈を以て、或ひは物を以て、或ひは友人を以て、或ひは敵人を以て、或ひは同國人を以て或ひは外國人を以て、或ひは知人を以て或ひは未知の人を以て、我等の弱きを助け、乏しきを補ひ給ふ、神の方法に富み給ふは彼が日々我等を助け給ふその方法の豐かなるに由て知るを得べし、我等に臨む患難は多し、然れどエホバは我等を皆な其中より援け出し給ふ。詩篇三十篇四十九節。（四〇、四）

恩惠の受器　我は自己に就ては罪を語り得るのみ、神に就てのみ善と義と愛とを語るを得るなり、**我れもし罪なしと言はゞ是れ自から欺くなり**、神は愛にして我は罪なり、神は光にして我は暗なり、神は眞理にして我は誤謬なり、我は恩惠の受器としてのみ自己を世に示し得るのみ、我を師と稱ぶ勿れ、**そは汝等の師は一人、即ちキリストなればなり**我に於てたゞ恩惠の動作を見よ、而して我れ罪人なるに救はれしが如く、汝等も亦我が如くに救はれよ。約翰第一書一章八節。馬太傳二十三章八節。（四〇、七）

神に感謝す　我に文才と藝術とあるなし、我は深く神に感謝す。我に交際の技量あるなし、我は深く神に感謝す。我は經濟の學と術とに暗らし、我は深く神に感謝す。我は政治を知らず、法律に疎し、我は深く神に感謝す。

我は唯依頼むを知る、見えぬ神に依頼むを知る、其他を知らず、我は深く神に感謝す。（四〇、八）

『聖書之研究』第百號　本誌幸にして茲に其第百號に達す、余輩はために己を祝せず、神に感謝す、詩人の言を藉りて曰ふ、

エホバよ、榮光を我等に歸する勿れ、我等に歸する勿れ、汝の矜恤と眞實の故によりてたゞ聖名にのみ之を歸し給へ、

と。詩篇百十五篇一節。（四一、六）

恩惠の數々　十年の長き愛のほか他人に何の負ふ所なく、たゞ一回のほか編輯を他人の手に委ねしことなく、廣告は三年一回之を用ひしに過ず、寄書を名士に求めず、購讀を人に勸めず、以て今日に至れり、而かも友人は廣く海の内外に渉りて存し、必要なるものは悉く與へられて、余輩は未だ曾て一回も飢餓を感ぜしことなし、新著は常に机上に横はり、小兒は常に遊具に富めり、是を恩惠と稱せずして何とか稱せん、余

輩は言ふ、余輩は斯世に在て最も幸福なる者なりと、十年、斯非基督教國に在りて神にのみ依頼してキリストの福音を宣ぶるを得て、余輩は神の實在を疑はんと欲するも能はざるなり。（四一、六）

生涯の實驗　余の教師は余に教へて曰へり（彼等は重に米國人なりし）、汝若し善き基督信者たらんと欲せば多く善を爲すべしと、余は彼等の教に從ひ、國に對し、社會に對し、人に對して出來得る限り善を爲さんとせり、然れども能はざりき、余の企圖はすべて失敗に終り、余は人をも己をも滿足する能はざりき。

余は失望せり、惟り密かに思へり、余は神に愛せられざるならん、故に余は善を爲す能はざるならんと、茲に於てか余は神を恨み、彼を疑ふに至れり。

或時、獨り小川の邊を徐歩せし時、靜かなる聲は余に告げて曰へり、汝、我がために善を爲さんと欲せしが故に誤れり、我が汝のために爲せし善

を受けよ、我は汝に善を爲されんと欲するよりも汝に善を爲さんと欲すと。

余は此聲を聞て大なる平和の余の心に莅むを覺れり、余は神を課工者と解して彼を誤解せり、神は父なり、彼を愛するは先づ彼に愛せらるゝことなり、善を爲せよと言ひて余に迫りし余の教師等は未だ神の何たる乎を知らざりし也。(四一、一二)

信者の名實 英國宣教師某あり、余輩が基督信者にあらざる理由十六ヶ條を數へられしと云ふ、余輩之を聞て身に戦慄せざるを得ず、然り、余輩は基督信者にあらざるべし、然れども神の奇しき恩惠の續々として余輩に臨むを如何せん、余輩は基督信者の名は喜んで之を教會と其信者に讓るべし然れども余輩に臨む神の恩惠は余輩之を受けざらんと欲するも能はず、余輩は自から進んで基督信者なりと稱する者にあらず、神の恩惠余輩に臨んで余輩をして止むを得ず基督信者たらしむるなり、余輩の罪は積んで山を爲すも神が余輩を惠み給ふ間は余輩は基督信者たらざらんと欲するも能はざるなり。(四二、四)

無勢力の感謝 我に政權なし、故に人は我に依りて利益を計らんとせず、我に教權なし、故に人は我に由りて教職に就かんとせず、我に政權なし、又教權なし、故に我に勢力あるなし、然れども政權なきが故に我は此世の裁判に干からず、教權なきが故に人の我を教會に訴ふる者あるなし、議會と教會とが喧囂を極むる時に、我に讃美あり、又靜かなる聖書の研究あり。(四二、六)

我が信ずる福音 我が信ずる福音は是れなり、即ち、神は我に代て我が爲すべき事を悉く成就げ給へり、我は今恩惠の下賜を待てば足る我が罪は事を爲さゞるに非ず、我が神を信ぜざるにあり、我は純乎たる恩惠の待望者となりて子たる我が本分を盡すを得るなりと。

世は之を稱して懶惰の福音と言はん、然れども我は識る、我等をして世

に勝たしむる者は我等の此信なることを。　約翰第一書五章四節。（四二、一二）

知らず、知る

我は如何にして我が事業を繼續し得るやを知らず我は如何にして我が子女を敎育し得るやを知らず、我は如何にして我が老後を養ひ得るやを知らず、我は勿論何時如何にして死するやを知らず、又我が子孫の如何に成行くやを知らず、然れども、我は知る、我が全生涯の彼の恩惠の中にあるとを、萬物悉く働らきて我がために益をなすことを、我と我が愛する者との永久へに彼の記憶に存することを、而して我は斯く知るが故に我が將來に就て知らずと雖も悲しまず、萬事を彼に委ねまつりて福祉をのみ期待しつゝ働らくなり。（四二、一二）

十年の恩惠

我れ何を以てか十年の恩惠を感謝せん、讃美の歌を以てか、否らず感謝の祭を以てか、否らず、我は我が渾身の努力を以て之を感謝せん、此事業の國人に歡ばれざるに關はらず、其の常に敎會の嫌

ふ所たるに關はらず、又、其眼に見えざる事業なるが故に、我れ自身が屢々倦怠を感じ、之を廢して他に轉ぜんとするの心を起すとあるに關はらず、我は奮然、茲に復たび素の決心に歸り、之を持續し、以て主の十年の恩惠に酬ゐん、願ふ、猶も能力の我に加はるありて、我が世に在らん限り、此幸福なる事業の我が事業として存せんことを。『聖書之研究』發刊十年の後に誌す。（四三、一〇）

宗教

宗教と政治　今や宗教を去て政治に入るべき時にあらず、今や政治を去て宗教に入るべき時なり、政治は勢力の應用にして宗教はその製作なり、若し製作するものは消費する者よりも偉大なりとすれば、宗教は政治に勝て世に有功なるものと稱はざるを得ず。（三三、一二）

罪人の宗教　我儕は我儕の德行を以て身を潔めんと欲する者に非ず、我儕は我儕の全身を其汚れたる儘に神に捧げて、彼の洗淨に與からんと欲する者なり、修養鍛錬と稱へて、自修自覺を敎ふるものは人の敎なり、信仰献身を說て罪科の消滅を傳ふるものは神の敎なり、基督敎が世の聖人君子の擯斥する所たるは其殊更らに罪人の宗敎たるが故なり。（三三、一二）

基督敎の女性　善は女性にして惡は男性なり、善は弱くして强し惡は强くして弱し、善は負けて勝ち惡は勝て負く、基督敎が女性的なるは其最終の勝利者たるの證なり。（三四、二）

宗敎雜誌　宗敎雜誌！何ぞ其名の女々しくして其規模の小なる、何ぞ政治雜誌と云はざる、何ぞ文學と哲學とを講ぜざる、何ぞ廣く人事に亘らざる、何ぞ劇切ならざる、何ぞ意氣昂然たらざると然り、然れどもシャロンの薔薇の花は脆く且つ移い易かりしも、而かも彼は世界を敎化して今日に至れり、傷める葦を折ることなく煙れる麻を熄すことなかりき、神の恙は實に人類の凡ての罪惡を身に擔ひし者なり、劇切なる者必しも世を益する者にあらず、奇拔なる者必しも人を眞理に導く者にあらず、小にして完全なるは大にして粗俗なるに勝る、宗敎雜誌の名亦深く耻とするに足らざる也。（三四、三）

强健なる宗敎　宗敎は個人的ならざるべからず、個人的ならざる宗敎は基礎なき根柢なき宗敎なり。

宗教は社會的ならざるべからず、社會的ならざる宗教は私人的宗教と成り易し。

根底を深き個人性に置き、幹と枝とを以て廣く社會の生氣に觸るゝ者、是れ乾くも涸ず、撼るも倒れざる宗教なり。（三四、五）

死せる宗教　神に對しては被動的なれ、人に對しては加動的なれ、汝の宗教を以て單に汝の身を修むるの要具とのみなす勿れ、宗教は社會的勢力なり、國家的生命なり、伸びて隣人に及ばざる宗教は死せる宗教なり。（三四、五）

平人の宗教　基督教は貴族の宗教にあらずして平民の宗教なり、富者の宗教にあらずして貧者の宗教なり、學者の宗教にあらずして愚者の宗教なり、僧侶の宗教にあらずして平人の宗教なり、基督教に由て社會は轉倒せらるゝなり、即ち其高き者は低き者となり、其貴き者は賤しき者となり、其賢き者は愚かなる者となるなり、基督教出てゝ社會の

大革命は期して待つべきなり。（三四、五）

國家的宗教　基督教は政治を語らず、然れども偉大なる國家は其上に建設せられたり、基督教は美術を說かず、然れども莊嚴なる繪畫と彫刻とは其中より出たり、基督教は哲學を講ぜず、然れども眞理の探究を促すものにして基督教の如きは他にあるなし、若し料るに其の名を以てせずして其實を以てすれば世に基督教に優るの國家的宗教あるなく、亦之に優るの美術と科學との奬勵者あるなし。（三四、五）

人の道と神の道　人の道は雪の如し、白くして寒し、神の道は日光の如し、輝きて暖かなり、潔白なるは嘉すべし、然れども煌々たるに若かず、正義の溫暖なる者、之を愛と云ふ、我儕は義人たるに止まらずしてクリスチャンたるべきなり。（三六、二）

晩春の默考　今日の所では純粹の基督教は英國に於てあるのではない、獨逸に於てあるのではない、米國に於てあるのではない、余輩の

識り且つ聽く所に依れは今日西洋諸國に於て行はれる所の基督教なる者は多くは儀式的、習慣的、經文的のものにあらざれば、批評的、破壞的、冷理的のものである、其中に勿論溫かき、活きたる心靈的のものもないではないが、然し古い習慣と新らしい學說とに壓せられて充分の發達を爲すことが出來ないで居る、茲に於てか余輩は私かに思ふ、最後に召されつゝある所の日本國が終には人類の最も要求する所の純粹に最も近き基督教を世界に供するの置位に立つ者ではあるまい乎と、即ち日本國は武を以て鳴るのではなくして、又は制度文物を以て人類の進歩を扶くるのではなくして、純粹なる宗教を以て世を化するの天職を授けられたる者ではあるまい乎、義家泰時のやうな武士と成つて咲き、親鸞、日蓮、蓮如のやうな高僧となつて開きし大和魂はルーテル、ウエスレー、ピーチャーに優るの大宗教家を出すに適するの精神ではあるまい乎、神と人類とは日本人より宗教的大革命を俟ちつゝあるのではあ

るまい乎、日本國の二千年間の歷史は我等に此大責任を委ねんための準備であつたのではあるまい乎、余輩は晩春の今日此頃、朧月の下に獨り躑躅花咲く庭園を靜かに步みながら此事を默考する時に何やら全宇宙が余輩の肩上に置かれしやうな心地がする。(三六、五)

完全なる宗教 基督教は完全なる道德であると云ふ者がある、基督教は勿論それである、然しそれのみではない、基督教は完全なる道德と同時に之に達するの途を示し之を行ふの力を供する者である、若し基督教が完全なる道德だけであるならば、それは最も無慈悲なる宗教である、そは道德は完全なるだけそれだけ守るに難い者であるからである、然しながら基督教は完全なる道德に添へて完全なる力を供する者である、基督教の實力は其宣言に相應して居る、故に我儕は基督教は完全なる宗教であると云ふのである。(三六、七)

絕對的宗教 基督教は絕對的宗教である、故に宇宙と人生とは基

督教を以て解釋さるべきものであつて、基督教は宇宙と人生とを以て解釋さるべき者ではない、基督教を以て眞理の一面と見做し、或は之を宗教の一つと算へる者は未だその何たる乎を知らない者である、基督教は絶對的宗教でなければ何んでもない者である。（三六、七）

興亡の因果　經濟の背後に政治あり、政治の背後に社會あり、社會の背後に道德あり、道德の背後に宗教あり、宗教は始にして經濟は終なり、宗教の結果は竟に經濟に於て顯はる、隆興然り、敗滅亦然り、余輩は其末を見て其本を知るに難からず、亦其源を知て其末を卜し得べし。（三七、四）

宗論の無益　宗教を異にする者と共に宗教を語るは誤解分爭を招くの虞多し、我儕斯かる場合に於ては宗教を語るを止めて、慈善、公益、勞働を談ずべきなり、善行の比較すべきなき宗教は取るに足らざる宗教なり、教義の外、他に討議すべきなき信仰は僞の信仰なり、宗論者に

向ては我儕に唯使徒ヤコブの辭あるのみ、即ち**汝信仰を我に示せ、我は我が行に由りて我が信仰を爾に示さん**と。雅各書二章十八節。（三七、七）

宗教と哲學　神を神自身に於て觀る、是れ宗教なり、神を物と人とに於て觀る、是れ哲學なり、仰いでは宗教あり、俯しては哲學あり、神を天に見、亦、地に索む、我儕、何れの處にも、エホバの神を見ん。（三七、八）

實驗の宗教　不可能事の一は神に託らずして基督信徒となること也、基督教は學理に非ず、故に智識を以て之を探るを得ず、制度に非ず、故に儀式に由て之に入るを得ず、基督教は基督に顯はれたる神の自顯なれば、神が其聖靈を以て自己を顯はし給ひし者のみ能く之を信ずるを得るなり、信仰は實驗なり、神の自顯の實驗を味はざる者は萬卷の書を讀むと雖も、基督に顯はれたる神の眞理を受くる能はず。（三七、一一）

玄妙ならざる宗教　キリストは神なりといふは彼は人なりといふよりも基督教の眞義に庶幾し、肉體の復活ありといふは、復活なし

といふよりも基督教の眞義に庶幾し、基督教は其外觀に於ては學理よりも寧ろ迷信に類似す、而かも實驗に基く教宗なるが故に迷信に非ずして合理的なり、玄妙ならざる宗教は宗教にして宗教に非ず、吾人は神秘的元素を删除せんと努むる近世の『新基督教』なるものに信を置くこと至て尠し。（三七、一一）

特別なる宗教　神ありと信ずる必しも基督教に非ず、基督教は特別の神を傳ふ、正義を貴ぶは必ずしも基督教に非ず、基督教は特別の正義を唱道す、永世を說くは必ずしも基督教に非ず、基督教は特別の永生と之に入るの特別の方法とを敎ふ、基督教は理想の宗教なりと稱して、未だ其眞相を言ひ悉せりと云ふを得ず、基督教は漠たる理想の宗教に非ず、特別の教義を傳へ、特別の義務を要求する宗教なり、而して其特別に何たる乎を敎ふるものを聖書なりとす、聖書に由らずして基督教の何たる乎を知る能はず。（三七、一一）

地的ならざる基督教　世に基督教的政治なるものあるなし、そは基督教に政治なるものなければなり、世に基督教的社會なる者あるなし、そは靈的團結たる教會の外に基督教は社會なるものを認めざればなり、基督信者は世を照すなり、然れども世と混じて之を革めんとは爲さず、**神の子等人の女子と婚を結びし**時に人類の墮落は始まれり（創世記六章二節）、余輩は天と地とを混同する近世流の基督教を排斥す。（三八、一）

新生物學　基督教は道義學に非ず、生物學なり、道德を傳へて人を敎へんとは爲さずして、生命を供して彼を活かさんとする者なり、キリストは敎師にあらず、生命なり、**イエス曰ひけるは誠に實に汝等に告げん、若し人の子の肉を食はず、其血を飲まざれば汝等に生命なし**（約翰傳六章五十三節）、キリストは道義の藥を投じて人を瘞さんとは爲し給はず、神の生命を供して彼の疾病を驅追し給ふ、基督教は罪惡の血淸療法な

り、生命を以て死に打勝つ者なり、而かも斯くの如くに斯教を解する者勘し。（三八、一）

宗教又宗教　宗教あり、又宗教あり、古典を弄ぶ宗教あり、儀式に耽ける宗教あり、交際を求むる宗教あり、宗教家を評する宗教あり、愛國を叫んで政治に類する宗教あり、然れども是れ我等の要求する宗教にあらざるなり。

血を以て爭ふ宗教あり（人を殺してに非ず）、**義と平和と聖靈に由れる歡喜**なる宗教あり（羅馬書十四章十七節）、即ち虚なる宗教に對する實なる宗教あり、道樂的宗教に對する奮鬪的宗教あり、儀文的宗教に對する心靈的宗教あり、批評的宗教に對する自省的宗教あり、交際的宗教に對する默禱的宗教あり、世は等しく之を宗教と稱す、然れどもすべての宗教は擧むべき貴むべき宗教にあらざるなり。（三九、一）

神學を厭ふ　自由神學あり、保守神學あり、『高等批評』あり、福音的神學あり、然れども神學は神學にして多くは是れ教職神學者の業なり、平民と平信者とは神學を要せず、彼等は神を直覺し、彼を愛し、彼に事ふ、平民をして神學の旋渦に入らざらしめよ、神學は少數の神學者に道を勸むるの途なるやも知らず、然れども神の愛し給ふ億兆の平民は神學の紛亂錯雜を厭ふて止まざるなり。（三九、四）

美術と宗教　宗教の深淺は其産する美術の大小に由て知るを得べし、深き宗教は大なる美術を産す、淺き宗教は美術を出さず、美術なき國民は宗教なき國民なり。

米國に美術と稱すべき美術なきを見よ、而して其宗教の取るに足らざる者なるを知れよ、誰か米國人より繪畫、彫刻、音樂の術を學ばんと欲する者あらんや、而かも我等日本人は今日まで我等の宗教を主として此美術なき米國人より學びたり、我等の信ぜし基督教が淺薄にして現世的なるは敢て怪むに足らざるなり。（三九、九）

科學と神學　今や科學は唯心說に還りつゝあるに、神學は唯物說に傾きつゝあり、科學者は天然を奇蹟視しつゝあるに神學者は成る可く丈け奇蹟の承認を避けつゝあり、**それ後の者は先に、先の者は後に爲るべし**(路加傳十三章三十節)、信仰の見地より看るも今や神學者は遠く科學者に及ばざるなり。(三九、一〇)

我が基督教　我が基督教は是れなり、神我が衷に働らき給ふと、我れ義しきにあらず、我れ聖きにあらず、我れ能力あるにあらず、神は其正義を以て其聖潔を以て、其能力を以て、我が衷に働らき給ふ、強き神が弱き我に顯はれ給ひしもの、是れ我が基督教なり、我は是れ以外に我が基督教あるを知らず。(三九、一〇)

日本人の宗教心　我等の心靈の友はウェスレーなるよりも寧ろ法然なり、ムーデーなるよりも寧ろ親鸞なり、宗教の同じきは信念の傾向の同じきに如かず、我等がイエスを仰ぎ奉る心は法然親鸞が彌陀佛に

依頼みし心に似て、英米の基督信徒がキリストを信ずるの心に類せず、我等は勿論イエスを去て釋迦に就かんと欲する者に非ず、然れども神が我等日本人に賜ひし特殊の宗教心を以て我等の主イエスキリストを崇め奉らんと欲す。(三九、一二)

世界最大の舊教國　今や世界最大の舊教國は北米合衆國なり、舊教の精神は行にあり、米國の精神は事業にあり、而して事業は行の別名たるのみ、而して事業を崇拜する米國人は名は新教徒なるも實は極端の舊教徒なり、余輩はルーテルが羅馬天主教に叛きし心を以て米國人の宗教に反對する者なり。(四〇、一)

第二の宗教改革　第二の宗教改革は第一の宗教改革に同じ、即ち行に對する信仰の勃興なり、第一の場合に於ては行は伊太利國に由て代表されたり、第二の場合に於ては米國に由て代表さる、第一の場合に於ては改革の任は獨逸に下れり、第二の場合に於てはその我日本に委

ねられんことを希ふ、我等は手にパウロの書翰を握るに非ずや、我等は之を以て弱き賤しき事業の小學を打破すべきなり。加拉太書四章九節。(四〇、一)

宗教の所在　宗教は文字に非ず、文典に非ず、神學に非ず、然り、人物に非ず、道德的感化に非ず、宗教は人の側に在りては信仰なり、神の側に在りては聖靈の恩賜なり、是等の二者ありて、完全無缺の聖書なくとも崇高偉大の人物なくとも、宗教は吾人の衷に存す、吾人は宗教を聖經又は人物以外に於て求めざるべからず。(四〇、四)

學識と信仰　聖書を究めよ、然れども聖書は宗教なりと惟ふ勿れ、宗教は聖書の中に在り、神學を究むるも可なり、然れども宗教を神學の中に求る勿れ、神學は宗教に就て攻究する學なり、宗教は神學以上なり、又聖書以上なり、宗教は我と神との直接の關係なり、此聖なる關係なくして、聖書學者も信者にあらず、神學者も宗教家にあらざる也。(四〇、四)

神學の要　神學は信仰のためには要らない、神學は神學のために要る、神學を壞つために要る、新神學は舊神學を壞つために要る、所謂高等批評は所謂る正統派神學を壞つために要る、神學のある間は神學が要る、爾うして人が信仰に賴つて神學に賴らなくなる時に神學は要らなくなる、余輩は神學が要らなくなる時の一日も早く來らんことを待望む者である。(四〇、五)

義の宗教　基督教は愛の宗教なりと云ふ、然り、又義の宗教なり、愛は情なり故に渝ることとあり、然れども義は主義なり、故に山嶽と共に動かず、義に倚らずして愛は愛ならず、我等時には愛ならざることあり、然れども何れの時に於ても義ならざるべからず、義は宗教の柱石にして又其基礎なり、嚴正なる義を離れて强健なる宗教あるなし。(四〇、六)

樣々の基督教　基督教あり又基督教あり、教會を立てんと欲する基督教あり、肉體の病を癒されんと欲する基督教あり、社會を改良せん

と欲する基督教あり、世に權力を振はんと欲する基督教あり、而して又自己の罪を悔ひて靈魂を救はれんと欲する基督教あり、名は同じく基督教なり、然れども實は千殊萬端なり、吾等は實に由て組すべし、名に由て合ふべからず、基督教の名は今や一致協同の標榜となすに足らざる也。（四〇、六）

科學と宗教　科學は天然界に於ける事實の觀察なり、宗教は心靈界に於ける事實の觀察なり、二者同じく事實の觀察なり、唯觀察の領域を異にするのみ、二者目的を共にし方法を共にす、事實を知らんと欲す、精確ならんと欲す、科學の敵は宗教に非ず、思辨なり、宗教の敵は科學に非ず、神學なり、科學と宗教とは善き兄弟なり、彼等は手に手を採て二者共有の敵なる思辨と神學とに抗すべきなり。（四一、五）

パリサイ派とサドカイ派　パリサイ派とは復活を信ぜし保守派なり、サドカイ派とは復活を否（いな）みし進歩派なり、前者は嚴格なる信

條の維持を主張し、後者は自由思想を標榜せり、二者全く其主張を異にせり、然れども相合して我等の主イエスキリストを殺したり、キリストは兩派孰れにも與みし給はざりしが故なり、而して余輩キリストと偕に歩まんと欲するが故に、パリサイの保守派にも與せざるべし、サドカイの進歩派にも與せざるべし、余輩はキリストの如く狹く（深く）、又キリストの如く廣からんと欲す、余輩は復活を教義として主張せざるべし、然れども事實として之を信ぜんと欲す、信仰に於ては保守にして智識に於ては自由ならんと欲す、余輩は「保守」「進歩」兩つながらに反對する者なり。（四一、五）

儀式の單純　儀式は單純なるを可（よし）とす、儀式は單純なる丈けそれ丈け莊嚴なり、聖書はキリストの葬式に就て錄（しる）す所なし、我等は又使徒等は如何にして葬られし乎を知らず、神の人モーセ死して「エホバ、ベテペオル」に對するモアブの地の谷に之を葬り給へり、今日まで其墓を知

る人なし」と云ふ(申命記三十四章六節)。

葬式然り、結婚式然り、若し必要あらんには、洗禮式亦然り、證人は神と天然と少數の友人にて足れり、俗衆の注目を惹いて莊嚴を裝ふの要は斷じて有るなし。(四一、六)

眞理と基督教 基督教は眞理なりと言ふ勿れ、先づ眞理の何たるを定めよ、然る後に基督教の眞理なるを證せよ、詩人コレリッヂ言へるあり、曰く「眞理に優さりて基督教を愛する者は基督教に優さりて自己の教會を愛する者にして、斯かる人はすべてのものに優りて自己を愛する者なり」と、而かも斯かる偏愛の人の所謂基督信者の中に多きは歎ずべきの限りならずや。(四一、九)

脆き證據論 基督教は歐米諸國の宗教なるが故に神の眞理なりと、又基督教は某々の名士を信徒として有するが故に神の眞理なりと、然れども是れ最も脆き證據論なり、そは歐米諸國に於て行はるゝ罪惡

にして吾人の想像にだも及ばざる所の者多ければ也、又基督教を信ぜざる名士は世に擧げて數ふべからざれば也、若し夫れ信徒の多きの故を以て誇る教會の如きは之を不明の極と稱せざるべからず、そは信徒を有すると最も多き教會は羅馬加特利教會にして新教諸教會にあらざれば也、眞理は之を奉ずると稱する國と人と其數とに由て判別する能はざるなり、然り、眞理の特性は多數に認められずして少數に認められるゝにあり、世の慧き者權ある者に納けられずして、愚かなる者弱き者に納けらるゝに在り、普通、基督信者に由て唱へらるゝ基督教證據論の如きは砂の上に建てられたる家よりも脆き者なり。哥林多前書一章二十六節(四一、九)

第二の宗教革命 教權を無謬の教會に求めて羅馬天主教會ありたり、之を無謬の聖書に求めて新教諸教會ありたり、無謬の教會を壞たんために第一の宗教革命ありたり、無謬の聖書を壞たんために第二の

宗教革命は行はれつゝあり、破壞は痛事なり、然れども必要事なり、第二の革命の成らん時に神の榮光は更に揚げらるべし。（四一、一〇）

宗教を棄てよ　余輩は人に宗教を變へよと言はず、宗教を棄てよと勸む、儀式と規則と信仰箇條とを以て普通道德に代へんとする、かの憎むべき宗教てふ制度を棄てよと勸む、佛教を去て基督教に入るは一の惡事を去て他の惡事に入るに過ぎず、米國の思想家エリシャ・ムルフォード曾て曰へるあり「キリストの宗教のみ惟り宗教に非ず」と、誠にイエスの貴きは彼が宗教を建てしが故にあらず、宗教を壞ちしが故なり、故に能くイエスの心を知る者は能くすべての宗教に反對す、人は先づすべての宗教（基督教をも含む）を棄つるにあらざればイエスの善き弟子たる能はざる也。（四二、一二）

唯一の宗教　若し世に宗教てふ者ありとせん乎、そは教職てふ僧侶的階級の手を藉りて神を拜する事にあらず、敬虔以て日常の業を執る事なり、神聖に地を耕す事なり、神聖に物を商ふ事なり、神聖に物を作る事なり、人はすべて祭司にして全地は神の聖殿なり、此ほか別に宗教あることなし、若し有りとせん乎、そは迷信なり、惡魔崇拜なり、何の惜氣なくして廢棄して不可なき者なり。（四二、一二）

彼我の宗教　彼は言ふ宗教は神を拜することなりと、我は言ふ宗教は人を助くることなりと、彼は言ふ神は皇帝の如き者なりと、我は言ふ神は父の如き者なりと、故に彼の宗教に法衣、祈禱文、聖餐器等の必要あり、我の宗教に其必要なし、彼我の宗教は其名を共にす、然れども其根柢を異にす、彼の我を納けざるは宜なり、我も亦彼を我が同志と呼ぶ能はざるなり。（四二、一二）

宗教の改進　宗教政治より離れて政治は改まり、宗教も亦革りたり、宗教、教育より離れて教育は進み、宗教も亦前みたり、宗教、教會より離れて又大に益する所なからざらんや、宗教素是れ無形の者なり、故に形

を減ずれば減ずる程其本性に還る者なり、宗教全く無形なるに至て其絶大の効力現はるべし、宗教のために計るに之を無制度の者たらしむるに若かざるなり。（四二、一二）

宗派建設の危險　人は余輩に就て言ふ「彼れ無宗派を唱ふと雖も實は新たに一宗派を建てつゝあり」と、余輩も亦之を恐るゝこと甚だし、カーライルは宗派を建てざりし、故に余輩はカーライルに倣はんと欲す、ホヰットマンは宗派を建てざりし、故に余輩はホヰットマンに倣はんと欲す、トルストイも亦宗派を建てず、故に余輩はトルストイに倣はんと欲す、余輩はカルビンに倣はず、又ウエスレーに倣はず、又其他の所謂宗教大家に倣はず、世の宗教家は余輩の宗派建設に就て安心して可なり。（四二、一二）

平和

平和の宗教　我は我が基督教のために人に殺さるゝことあるも人を殺すことあらじ、我は我が信仰のために人に迫害せらるゝことあるも人を迫害することあらじ、基督教は血を流すことあり、然れども之れ我の進んで流すにあらず、守て流さるゝなり、基督教は我に取ては徹頭徹尾平和の宗教なり。（三五、一）

戰爭の止む時　戰爭を止むるに二途あり、進んで敵意を露すにあり、退いて自己を正すにあり、而して神は常に第二途を擇び給ふ、然れども人は常に罪を他人に歸して自身は美名を帶びて死せんと欲す、是れ戰爭の有る所以なり、名譽心なり、傲慢心なり、流血をして有らしむる者は是なり、人類が自己を省みるに敏にして他を責むるに鈍くなる時に至て戰爭は全く廢止せらるゝに至るなり。（三六、一一）

戰爭を好む理由　生命を惜まざるを以て勇氣なりと稱す、而かも人類の多數は生命を愛せざる者なり、人世に絶望して常に死を思ふ、故に他人を殺して自からも死せんと欲す、是れ此世に在て戰爭が常に多數の贊同を博する所以なり、若し生命の眞價にして知られんか、人類は直に戰爭を廢するに至るべし、絶望家の世に多數を占むる間は開戰の聲は常に高かるべし。（三六、一一）

出征軍を送りて感あり　嗚呼、我れ如何にして戰爭を廢むるを得んか、我は如何にして是等無辜の良民を敵彈に曝らすの慘事を止むるを得ん乎、彼等を失ふて孤獨に泣く老媼あるに非ずや、彼等に離れて饑と寒さに叫ぶ寡婦と孤兒とあるに非ずや、之を見て泣かざる者は人にして人に非ず、我は人が萬歳を歡呼するを聞いて其聲に和することを能はざりき。

我れにして若し王者ならん乎、我は無理にも戰爭を壓止せんものを、我

にして若し寵臣ならん乎、我は戰爭を諫止して止まざるべし、然れども微弱なる我れ、我に唯、泣くに涙あり、祈るに言葉あるのみ、嗚呼、我れ如何にして戰爭を廢むるを得んか。

福音を說かんのみ、然り、キリストの平和の福音を說かんのみ、而して一日も早く天國を此世に來らせんのみ、是れ我の爲し得ることにして、亦無効の業にあらず、今の時に方て不可能事を企てゝ直に戰爭を廢せんとするも何の益かある、人々其心に神の靈を宿すに至るまでは戰爭の聲は止まざるべし、キリストに在りて一人を救ふは戰爭の危害を一人丈け減ずることなり、而して戰爭は非戰論を唱へて止むべきものに非ずして、キリストの福音を傳へて廢すべきものなるべし、嗚呼、我は覺れり、我は千百年の將來を期して、我が目前に目擊する慘事を根絶せんために我が世に在らん限り更らに熱心にキリストの福音の宣傳に從事せん。（三七、三）

無抵抗主義の眞意

キリストの教は何う考へて見ても無抵抗主義であります、「汝惡に抗するなかれ」とは其眞髓であると思ひます、爾うして若し神にして存在し給はざる者でありますならば是れ或は實に不道理なる教であるかも知れません、然かし神が在す以上は是れ當然の眞理であると思ひます、神はたゞ命令的にのみ惡に抗する勿れとは宣ひません、神は「喜んで惡人の申出を納れて我が爾に下さんとする大なる恩惠を受けよ」と宣ふのであります、私共が惡人より無理の要求に接する時に神より更らに大なる恩惠下賜の約束に接するのであります、然るに多くの人は此事を知らないで、惡に抗して恩惠を逸するのは實に愚かなることではありません乎。

平和の宣傳者

歡喜の音信を傳へ、平和を告げ、救濟を宣べ、シオンに向ひて汝の神は統べ治め給ふと云ふ者の足は山の上にありて如何に美はしきかな(以賽亞書五十二章七節)、戰鬪を語らず、平和を告げ、殺伐を勸めず、救濟を宣べ、負けて勝ち、死して甦りしイエスキリストの福音を宣傳ふる者は幸福なるかな、彼の足は山の上にありて麀の足の如くに輕し(詩篇十八篇卅三節)、彼の心は賤の伏屋を訪ふて、嬰兒の心の如くに安し、彼は擾亂を知らず、靜穩を識るのみ、死を促さず、生を勸むるのみ。(三七、五)

戰爭の止む時

勝つこと必しも勝つに非ず、負けること必しも負けるにあらず、愛すること是れ勝つことなり、憎むこと、是れ負けることなり、愛を以て勝つことのみ是れ永久の勝利なり、愛は嫉まず、誇らず、驕傲らず、永久に忍ぶなり、而して永久に勝つて永久の平和を來たす、世に戰鬪の止む時は愛が勝利を占めし時のみ。(三七、五)

戰時の事業

今や世に燃木を投ずる者は多し、靜肅を供する者は尠し、爭鬪を勸むる者は多し、和親を促す者は尠し、此時に方て我儕は主の靜肅に居らんかな、而して玆處に居て熱せる同胞に主の清涼を頒た

んかな敵愾の渇を癒すに修好の清水を以てせんかな、戰爭の噪音を靜むるに福音の美樂を以てせんかな、平和は地より出ず、天より來る、天の神を紹介して地は始めて平穩に歸せん。（三七、六）

吾人の非戰論　非戰の理を說くは難し、然れども、イエスキリストを信じて爭鬪は其總ての種類に於て吾人の忌み嫌ふ所のものとはなれり、吾人の理性の說服せらるゝ前に吾人の情性は感化せられたり、吾人は何故か未だ其理由を解する能はず、然れども吾人、一たび心にイエスキリストを宿してより、憤怒の角は悉く折れて、柔和を愛するの人とはなれり、吾人の非戰論なるものは此情性の大變化の結果に外ならず。（三七、六）

劍と鋤　我儕は奇運を信ぜず、故に信を劍戟の結果に措かず、我儕は道理を信ず、故に正直なる平和的勞働の結果を信じて疑はず、劍は確かに鋤に優さるの征服器にあらざるなり。（三七、八）

無抵抗主義の勝利　我儕は惡人の侵害に抵抗せず、故に彼等は我儕を侮つて曰ふ、與かり易きは基督信者なりと。

然れども彼等は未だ神の我儕のために戰ふを知らざるなり、神は先づ惡人の品性を更らに一層墮落せしめ、而して彼等をして竟に自から其身をも靈をも失はしめ給ふ、怕るべきことにして神と其受膏者とに反くが如きことはあらず、故に詩人は訓誡を述べて曰く、**子にくちつけせよ、恐らくは、彼れ怒を放ち、汝等途に滅びん**と（詩篇二篇十二節）。（三七、八）

最も無慈悲なる者　敵の堅壘一箇を陷れんがためには數千の生命惜むに足らずと云ふ者あり、然れども試に其生命の一が我が子或ひは我が夫なりと思へ、果して之を是れ惜むに足らずと言ふ乎、世に無慈悲なる者にして、筆を弄して戰事を論ずる論士文客の如きはあらず。（三七、九）

惟キリストに聽かんのみ　トルストイ一人は露國一億三千

萬の民よりも大なり、キリスト一人は世界十三億の人よりも大なり、米のルーズベルトと英のチャムバレーンとは戰爭の効益を說くも我儕は彼等に聽くの要なし、全世界の新聞記者は筆を揃へて殺伐を贊するも我儕は彼等に從ふの要なし、我儕は惟主イエスキリストの言に聽けば足る、世が擧つて戰爭を謳歌する時に、我儕は天より降り給ひし神の子の聲に聽いて我儕の心を鎭むべきなり。（三七、九）

平和現實の手段　平和を地に來たさんとする乎、キリストの平和の福音を說くべし、平和現實の手段として之に勝さるもの他にあるなし、今や戰爭の聲尙ほ喧しき時に際して、我儕は益々福音宣傳の聲を高うすべきなり。（三七、一〇）

平和の所在　平和は地に於て在らず、天に於て在り、天の門戸を人の前に開き見よ、彼は其內の平和を窺ふを得て地に在て自から平和を行ふ者とならん、平和の利益を說くも之に耳を傾けざる彼は平和の美

を一瞥して其熱心なる景慕者となるべし、要は天上の美を人に示すにあり、然らば爭鬪は自から地に於て絕えん。（三七、一〇）

平和の長短　武力を以て來たせし平和は瞬間的平和のみ、政治を以て來たせし平和は暫時的平和のみ、而してキリストの福音を以て來たせし平和のみ永久的平和なり、平和は其長短に關はらず貴きものなるに相違なし、然れども其長きは短きに勝さるが故に、我は軍人、政治家たらんよりは寧ろ傳道師たらんことを望む者なり。（三七、一〇）

戰時のクリスマス　天使は聖子の降誕を祝して曰く**天上には榮光神にあれ、地には平安、人には恩惠あれ**と、而も今や地に平安あるなく、殺氣空に充ち、忿怒天下に遍し、故に人は曰ふ、神の恩惠を以てするも終に平安を地に來す能はずと。

然れども恩惠は既に世に降れり、人の之を受けざるのみ、平和の基礎は既に定められたり、人の之に據らざるのみ、神は平和を降せり、然るに人

は自ら好んで戰爭を開けり、神は平和をもて人に强ひ給はず、人の自ら進んで、神の平和に入らざる限りは、平和は海の如く地を掩ふと雖も戰爭の音は絶えざるなり、我等は戰時に此聖節を守りて、更に聲を大にして、平和を同胞に勸むる者なり。（三七、一二）

平和主義者の日　クリスマスは平和主義者の日なり、誰か此日に際して戰を唱ふるものあらんや、主戰論者は此日を守るの資格を有せず、天使讃美を唱ふるの間、彼等は聲を潛めて、沈默を守るべきなり、一年一回天使は降り來つて我等の平和の聲に和す、而して地に戰鬪の絶ゆるまでは我等の此聲は絶へざるべし、世にクリスマスが祝はるゝ間は平和主義者は其勢力を失はざるなり。（三七、一二）

平和の基　平和のために戰ふと言ふ、何ぞ潤すために火を放たざる若し火を以て潤すを得ば戰ふて平和を來すを得べし、然れども西が東より遠かる間は、氷炭相容れざる間は、平和は戰爭に由りて來らざるべし、平和は平和より來る、人類の罪を自己に擔ふてキリストは世界平和の基を据ゑ給へり、平和を世に來たさんと欲する者は總てキリストに倣はざるべからず。（三七、一二）

平和の完成　人と人との平和は神と總ての人との平和成りてより來る、神なくして平和あるなし、神と或人との平和成りて未だ全き平和あるなし、神と總ての人との平和成りて始て人と人との完全き平和は世に臨むなり、平和の完成は之を世界遍通の傳道に待たざるべからず、地球の表面に暗黑の一隅を殘すは平和攪亂の一因を存すなり、軍人が劍を拔いて爭ふ前に傳道師は先づ往いて暗黑の荊棘を掃ふべきなり。（三七、一二）

微なる非戰論　非戰の聲は微なり、然れども寡婦が其杖として賴む一人の男子を召集されし時に彼女の心底に微なる非戰の聲揚る、今や戰爭は天下の輿論なり、而して世の文士と論客とは筆を揃へて戰爭

を謳歌す、此時に當て我等キリストの福音を宣べ傳ふる者は天下幾多の寡婦に代て微なりと雖も非戰の聲を揚げざらんや。（三八、一）

寡婦の聲　戰爭は國家の利益ならん、然れども寡婦も亦國家の一部分なり、寡婦の聲は勿論天下を動かすに足らず、然れども彼等も亦其憂愁を訴うるの權利を有す、彼等の聲は勿論國家の聽く所とならず、然れども若し彼等にして彼等刻下の眞情を語るの自由を與へられんには、彼等は聲を放つて言はん、「戰爭は我等に取ては非常の苦痛なり」と。

平和の勝利　東亞に在ては、余輩の同胞は劍と銃と砲とを以て歐人に壓迫を加へつゝある今日、余輩はペンとインキと紙とを以て余輩の友人を歐大陸に作りつゝあり、余輩の小著述の獨逸國に現はれてより以來、アルプス山中より、ダニユーブ河邊より、「北海」の濱より、余輩に書を寄せて好意を通じ來る者頻々として絶えず、由て知る、ペンは誠に劍に優るの武器なるとを、東亞の戰鬪酣なる頃、余輩は既に大陸の西に於

て永久の平和を結びつゝあり、榮光必ずしも之を軍人に誇すべからず、平和の勝利は戰爭のそれに勝さる。（三八、三）

最後の勝利　戰に勝つて勝つのてはない、眞理に從て勝つのてある、戰に負けて負けるのではない、眞理に反いて負けるのてある、眞理を究るのは劍を磨くよりも大切てある、眞理は永久に勝つための武器てあつて、劍は僅かに一時の利を制するための機械に過ぎない、我儕は最後に宇宙に王たらんがために劍を以てするよりも、寧ろペンを以て戰はんと欲す。（三八、三）

殘忍酷薄の極　同胞の生命を犧牲に供し、戰に勝ちたればとて商權の擴張を云爲す、商權果して人命に優りて貴重なるものか、世に殘忍酷薄なるものにして主戰論者の如きは非ず、彼等は同胞の鮮血の未だ乾かざる先に既に利益の獲得を公言す、彼等は敵を愛せざるのみならず、又同胞を敬せざるものなり。（三八、四）

日露永久の平和　露西亞人は云ふ、憎むべきかな日本人と、日本人はいふ、憎むべきかな露西亞人と、然れども神は云ひ給ふ、愛すべきかな日本人、愛すべきかな露西亞人と、神の心を以て見て露西亞人は日本人に取り愛すべき者となり、日本人は露西亞人に取り愛すべき者となる、日本人と露西亞人とは神に依りて今日直に永久の平和を結ぶを得べし。（三八、七）

平和克復の困難　平和を破るは易し、平和を復すは難し、愚者も容易に之を破るを得べし、賢者も容易に之を復す能はず、平和の貴きは其回復し難きに存す衆愚の聲に聽いて濫りに之を破り、怨恨を千載に遺す者は禍ひなるかな。（三八、九）

主戰論者の論理　世界人道のために平和の回復を要すとならば始より平和を破らざるに若かず、已に之を破りながら人道のために其回復を急ぐと云ふ、戰爭果して善事なるか、何故に之を永久に續けざ

る、然れども人道の聲に聽いて其中止を計るといふ、是れ戰爭の惡事なるを認めてに非ずや、正義のために戰を開き、人道のために之を止むと云ふ、主戰論者の論理は到底余輩の會得し得る所にあらず。（三八、九）

教育と平和　戰ふに巧にして和するに拙き者、之を今日の愛國者なりとす、彼等は惡むを知て愛するを知らず、戰場に斃るゝより外に國を護るの道を知らず愛は武器に優る防國の具なり、人を愛するものに非ざれば永久の平和を結ぶ能はず、愛國を敵愾の精神とのみ解せし國民は戰場に敵を破り得るも、好意を以て敵と和するの術を知らず、常に修むべきは愛人の精神なる哉。（三八、九）

愛の順序　第一に神を愛すべし、第二に世界と人類とを愛すべし、第三に國と國人とを愛すべし、第四に自己と家族とを愛すべし、愛を此順序に循て施して我はすべての人と平和を結ぶを得べく、我事業は榮え我が心は常に平安なるべし、然れども愛の此順序を轉倒して、我はカイ

ンの如くなりて、人は皆我の敵となりて、我は亦人の敵となるべし。（三八、九）

孤兒の敵　一方には孤兒の教育を唱へ、一方には戰爭の利益を道ふ、かくて一方には孤兒を扶けながら、一方には盛に孤兒を造る、笑止千萬とは主戰論者の孤兒救濟事業なり、彼等は孤兒の敵なり、其友に非ざるなり。（三八、九）

戰爭の善惡　我れ或時は戰爭は善事なりと思ふ、然れども翻つて念ふに是れ我が信仰の薄弱なる時に限る、我が信仰の强固なる時に我は戰爭の惡事なるを信じて疑はず、我れ深く我が神を信じて戰爭の多少の利益を見て欺かれず、我が聖書は明白に我に敎へて曰ふ、戰爭は人を殺すことなり、而して**人を殺す者は火と硫磺の燃ゆる池にて其報を受くべしと。**（默示錄二十一章八節。（三八、一二）

戰勝と飢饉　國威四海に擧て民は飢餓に泣く、國威の宣揚を祝する聲は高し、餓民の窮迫を悲む聲は低し、是れ戰爭の結果たるなり、覇氣は增し同情は減ず、敵を殺し得て同胞を援け得ず、外に獲て內に失ふ、ナポレオン大帝表白して曰く人は兵力を以てして永久に涉る何事をも爲す能はずと、彈藥と銃劍とは以て民の空腹を充たすに足らず、戰爭歇んで後に憂苦の聲は擧らざらん也。（三九、一）

戰捷の結果　戰捷の結果は何？國債の激增、投機熱の昇騰、軍備の擴張、而して之に伴ふ美術、文學、哲學、道德、宗敎の衰退是れなり、肉に勝て靈に敗る、是れ天然の法則なり、悲むべし、然れども敢て怪むに足らざる也。（四〇、二）

基督敎の特長　基督敎は善き軍人を作らざるべし、然れども基督敎は善き農民と職工とを作る、基督敎は善き宮廷を作らざるべし、然れども基督敎は善き家庭を作る、基督敎は外に張るに善からざるべし、然れども基督敎は中を固むるに善し、基督敎は特に平和の宗敎なり、隣

人を愛し、家族と親み、靜かに人生を樂ましむる宗教なり。（四〇、九）

戰爭廢止の歌　我が理想は神の思想なり、而して神の思想は終に事實となりて世に顯るべき者なり、理想を語るは夢を語るに非ず、未來の事實を語るなり、**神の僕モーセの歌と羔の歌**とは正義終極の勝利の歌なり、戰爭絕對的廢止の歌なり、萬物復興の歌なり、地の改善、民の充足の歌なり、歌は理想なり、未來の完全を今示されて之を視て歡びて發する聲なり。　默示錄十五章三節。（四一、一）

戰爭の結果　此世の牧伯と僞りの預言者とは言へり、戰爭は可なりと、然れども神は言ひ給へり戰爭は非なりと、而して神の言は聞かれずして戰爭は開かれたり、而して今や戰爭の結果は顯はれたり、貧困、飢餓、絕望、自殺！敵を門前より攘ひ得て敵は門內に現はれたり、戰爭は敵を絕たず、新たに敵を作る、神の預言者は言へり

凡そ人を虜にする者は己れ又虜にせられ、刀にて人を殺す者は己れ

又刀にて殺さるべし、聖徒の忍耐と信仰茲に在り（默示錄十三章十節）。

然り、聖徒の信仰は非戰にあり、國民は擧て戰爭を唱へ、敎會は擧て戰爭に和するも聖徒の忍耐と信仰は非戰にあり。（四一、一）

神の論證　神の言辭は事實なり、神の議論は事實なり、神の證明は事實なり、神は聲を出して語り給はず、默して事實を以て語り給ふ、戰爭の非なるを論じ給ふに戰爭の結果を以てし給ふ、敎會の非なるを示し給ふに敎會の實情を以てし給ふ、論ずるを休めよ、人よ、唯見よ、見て覺れよ、而して改めよ、神は耳より、眼より、鼻より、口より、然り、上より、下より、地の四方より事實を以て汝に迫り給ふ。（四一、一）

無抵抗主義の威力　我等は無抵抗主義を採る、然れども神は無抵抗主義を採り給はず、彼は我等に代りて抵抗し給ふ、萬事を神に任かし奉る我等に逆ふ者は禍なり、そは彼は我等に代りて**彼等を碎き、彼等を恤まず、惜まず、憐まずして滅し給ふべければ也。**　耶利米亞記十三章

十四節。（四一、四）

佛法の無抵抗主義

何故に斯くなりしぞと己が身の
姿に耻ぢよ黒染の袖

是れ法衣の下に鉈を隠くして師の身を護らんとせし熊谷蓮生坊直實を誡しめんとして法然上人の詠ぜし歌なりと云ふ、以て七百年前の佛教の今日の基督教に優さる萬々なるを知るべし。（四一、五）

近時の教訓　戰て一國に勝てば他の一國は起て我敵となる、人の怒は神の義を行ふ能はず、戰爭は以て平和を來たすに足らず、而かも惡魔に欺かれて國民は劒を磨て止まず、言ふ、更らに大なる軍隊を與へよ、然らば平和を保たんと。（四一、八）

國を亡す者＝敵愾心　若し日本國を亡す者あらん乎、兵備の不足にあらざるべし、愛國心の缺乏にあらざるべし、其國民の熾烈なる敵愾心なるべし、敵を憎むの念の激烈なるより、萬事を忘れ、萬物を抛ち、彼を斃さゞれば息まざるの心なり、此心ありて人は敵を斃して己も亦斃る、四海素と是れ兄弟なり、彼を傷くるは我を傷くるに等し、敵を憎んで息まざれば我が心又愛に渴して死す、愛の正反對なる敵愾心は決して國を護るの精神にあらざるなり。（四二、五）

無抵抗主義　惡人我に對して起てば我は彼に抗せずして忍耐と宥恕とを學ぶ、而して彼は惡を行ひ盡して終に自から亡ぶ、得る者は我にして失ふ者は彼なり、神は彼を以て大なる恩惠を我に施し給ふ、我は彼を憐む、故に彼のために祈る。（四二、五）

人類の王　今の世界に二大偉人あるを見る、其一を露國のトルストイ伯となし、其他の者を米國のカーネギー氏となす、前者は終生非戰を主張し、後者は廢戰を畢生の業となす、二者に比べん乎、法王は光を失ひ、監督は愧耻に呑まる、若しキリストの弟子にして戰爭を恕し得ると

せん乎、彼は如何なる罪悪をも恕するを得べし、而かも子子を流して駝駝を呑む今の所謂教役者輩は戰爭を可とし軍旗を祝福して恥ず、二氏の如きは誠に人類現時の王と稱すべし。（四二、九）

山と祈禱　我れ弱き時に獨り靜かなる山に入り、其處に我の磐にして我が救主なるエホバの神に我が祈禱を以て接す、而して見よ、入る時には弱かりし我は强き者となりて出て來るなり、偉大なるかな山の勢力、量るべからざるかな祈禱の効果、山と祈禱とありて人世は苦痛の谷に非ず。

我れ山にむかひて目を擧ぐ、
我が扶助はいづこより來るや、
我が扶助は天地を造り給へるエホバより來る。
（詩篇第百二十一篇）。（三五、九）

花を見て感あり　花に歡喜あり、亦悲哀あり、其艶麗なるや歡ぶべし、其片時的なるや悲むべし、夢幻に等しき斯の世に在ては美其物に

悲哀の色あり、**然れども主の道は窮りなく存つなり。**（彼得前書二章廿五節）。（三、六、五）

基督信者の春　心の春は既に到れり、今や天地の春は臨まんとす、鳥は囀りて我が衷なる歡に和し、花は咲いて我が靈なる榮を彰さんとす、春陽將に内外より我に迫らんとす、我が跳躍の時は來れり。（三、七、二）

探梅　君子何處に在る、義人、何處に在る、眞心を以て神とキリストとを信ずる者は何處に在る、世は凋落を極め、正義は利益と混ぜられ、キリストは僅かに隱密の所に於て信ぜられて、我は我が信を語るの友を求めんと欲して得ず、世評の嚴寒を怕れずして咲く花は何處にある、迫害の裡に在て香氣馥郁たる信者は何處に在る、我は見んことを欲す、信仰の梅の花を、我は途の遠きを厭はず、坂の嶮しきを懼れず、梅花に遭ふて我が心中の慰藉を談じ、堅氷の裡に清和の春を語らんと欲す。（三、七、二）

春と靈　春來るも靈臨まざれば我に於て何かあらん、我は花の美しきを歡ばず、我は花に於て我が主の美しきを觀んと欲す、春の山野に臨むが如く、神の靈は我が心に降らざるべからず、然らざれは我は春に遭ふて徒に我が衷の悲痛を感ずるのみ、來れ聖き靈よ、來て我が衷なる歡喜をして外なる麗色に劣る所あらざらしめよ。（三、七、四）

今年の春　美なる哉天然、汝に問然する所あるなし、唯、我儕に悲痛在るが故に、我儕は汝と共に歡び得ざるなり、野は菫花を以て布きつめられて紫壇の如し、丘は櫻を以て彩られて白宮の如し、神の聲に應じて春は故國の山野に臨め、惟り悲む、同胞の此春を樂しみ得ざる者の多きことを。（三、七、四）

靜謐の所在　靜謐は天然にあり、神の造りし天然にあり、靜謐は聖書にあり、神の傳へし聖書にあり、一輪の耨斗菜の露に浸されて其首を低るゝあれば、一節の聖語の我が心中の苦悶を宥むるあり、怒濤四邊に暴るゝ時に、我は草花に慰癒を求め、舊き聖書に世の供し得ざる平靜を

探る。（三七、五）

果樹を見て感あり 咲く花は多し、實となるは尠し、實となるは多し、熟するは尠し。

慰めよ、我が靈、汝の傳道も亦斯の如し、聞く者は多し、信ずる者は尠し、信ずる者は多し、救はるゝ者は尠し、天然の法則は又神の聖旨なり、汝は「傳道の失敗」を唱へて汝の心を懊ますべからざるなり。（三七、七）

收穫月 目を擧げて觀よ、既や田は熟きて收穫時になれり（約翰傳四章三十五節）。

穡時の節筵を守るべし、是れ即ち汝が勞苦て田野に播ける者の初めの實を祝ふなり、又收穫の節筵を守るべし、是れ即ち汝の勞苦に由りて成れる者を年の終りに田野より收穫る者なり（出埃及記二十三章十六節）。

涙と共に播く者は歡喜と共に穫らん、其人は種を携へ涙を流して出行

けど、禾束を携へ喜びて歸り來らん（詩篇百二十六篇五、六節）。（三七、一〇）

宇宙の精算 宇宙は正義活動のための精密なる機關なり、故に此宇宙に在て善を爲して其報賞を受けざるはなし、又惡を爲して其刑罰を蒙らざるはなし、宇宙の宏大なる善惡の反應は直に其施せし方面より來らず、然れども東に向て爲せし善は西より報いられ、北に向て爲せし惡は南より罰せらる、宇宙は大銀行の如し、甲に拂ふべきものを乙に拂ひ、乙より受くべきものを丙より請求す、而も年を經て後に厘毫の貸借あるなし、吾人此信用すべき宇宙に在て惜むことなく出來得るだけの善を凡ての人に向て爲すべきなり。（三七、一二）

希望の宇宙 これ希望の宇宙たるなり、何ぞ泣き悲み憤るを須んや。神の聖旨は成りつつあり、世界の人皆悅ぶべし、失望はただ惡人にのみ存す、一たび罪を悔ひて神に還り來らん乎、我儕は直に希望の宇宙に生れ出づるなり、是故に人キリストに在る時は新に造られたる者なり、舊

きは去りて皆新しくなるなり、宇宙の惡しきが故にあらず、之を識る眼の惡しきに由るなり、若し爾の目瞭かならば全宇宙も亦明かなるべし（馬太傳六章廿二節參考）、希望の生命を受けよ、而して此宇宙の希望の宇宙なるを覺れよ、既に希望の宇宙に在りながら、之を呪ひて憤死する勿れ。（三八、六）

幸福のある所　幸福は政治の外にある、政治に野心がある、奸策がある、結黨がある、政治は清淨を愛し、潔白を求むる者の入らんと欲する所ではない。

幸福は敎會の外にある、敎會に競爭がある、嫉妬がある、陷擠がある、敎會は神の自由を愛する者の長く止るべき所ではない。

幸福は神の天然に於てある、茲に自由がある、誠實がある、眞率がある、ア、我が愛する友よ、來て我等と偕に天然を通して天然の神と交はれよ。（三八、六）

秋酣なり　庭前の龍膽開き、菊花また芳し、靜肅の秋は地上の平和と共に來れり、之に平和の神より來る恩惠と平和との加はらんことを日露戰爭終結の後に誌す（三八、一一）

我が愛する者　我が衷に大なるものあり、ヒマラヤ山あり、アマゾン河あり、大陽系あり、オライオン星あり。

我衷に小なる者あり、石竹あり、雛菊あり、をだまきあり、龍膽あり。

我は雄大なる者と纖美なる者とを愛す、神と小兒とを愛す、キリストと罪を悔める罪人とを愛す、其他を愛せず。（三九、一）

晩秋の感　冬に就て思はず、春に就て思ふ、夜に就て思はず、朝に就て思ふ、死に就て思はず、生に就て思ふ、墓に就て思はず、復活に就て思ふ、我等の崇むる神は死せる者の神に非ず、活ける者の神なり、光の子なる我等は死と暗とに堪ふる能はざるなり。（三九、一一）

夏と天然　神を衷より視よ、又外より視よ、靈に於て視よ、又物に於て

視よ、聖書に於て視よ、又天然に於て視よ、神を一方より視て彼を誤解するの虞れあり、夏は來れり、我等は天然を學んで天然を透ふして天然の神に達すべし。（四〇、七）

宇宙の占領　自覺せよ、又自忘せよ、自己の罪を悔いて神に至れよ、又自己の罪を忘れて天然に遊べよ、神の如く聖くなれよ、天然の如く自由なれよ、神の子となれよ、又天然の子供となれよ、衷に省みて又外に伸びよ、**汝等に國を予へ給ふ事は汝等の父の喜び給ふ所なり**と主は曰ひ給へり、己の靈を救はるゝと同時に宇宙を己が有と爲せよ。　路加傳十二章三十二節。（四〇、七）

夏の夕　**神、アブラハムを外にたづさへ出して言ひたまひけるは天を望みて星を數へ得る乎を見よ**と、然り、壹等星二十一、貳等星七十、三、參等星二百三十、四等星七百三十六、五等星二千四百七十六、六等星七千六百四十七、以上は肉眼に映ずる者なり、第九等星に至るまでのすべての

星を數ふれば六十三萬餘、第十等星を合すれば總數二百三十一萬一千に達すべし、而して未だ全宇宙の一隅を窺ひしに過ぎず、小事に齷齪して常に頭を低るゝ者よ、時にアブラハムの如くに神に携へられて郊外に出て、天を望みて星を數へ得る乎を見よ。　創世記十五章五節。（四〇、七）

秋を迎ふ　秋よ來れ、汝の燈火と新著述を持て來れ、他人は活動せんとする時に我は汝と偕に默考せん、我は汝の清空に我が心を洗はん、汝の凉風に我が疲れたる腦を休めん、夏は我に取りては又勞働の時期なりし、來れ、我友秋よ、來て空乏の我を充たせよ。（四〇、九）

秋と河　秋到る毎に余は河を懷ふ、二箇の大なる河を懷ふ。

其第一は石狩河なり、森深く、水靜かに、蔦は弓形を爲して深淵を覆ひ、赤葉其下に垂れて紅燈の幽暗を照すが如し、大魚流水に躍り、遠山其面に映る、余は幾回となく獨り其無人の岸を逍徘し、或ひは清砂の上に立ち、或ひは葦の中に隱れて余の靈魂の父と語りぬ。

其第二はコンネチカット河なり、之をホリヨーク山上より望んで銀河の天上より地下に移されしが如し、余は其岸に太古の鳥類の足跡を探り、或ひは楓樹の下に坐し、或ひは松林の中に入りて、異郷に余の天の父と交はりぬ。

静かなる秋と静かなる河！余は其岸に建てられし余の母校を忘るゝ事もあらん、然れども秋到る毎に余に静かなる祈禱の座を供せし河を、余は死すとも忘る能はざる也。（四〇、一〇）

秋の默示　銀河穹蒼に漲り、清霄星を降らすに似たり、湖上風雨去て、峰巒其面に鮮なり**エホバ其聖殿に在ます、世界の人其前に靜かにすべし**、彼れ細微き聲を以て語り給ふ、人皆な其默示に接すべし。　哈巴谷書二章二十節。（四一、九）

萬物悉く可なり　星は音信を傳へて曰く萬物悉く可なりと、地は洪聲を放て曰く萬物悉く可なりと、歴史は其教訓を傳へて曰く萬物悉く可なりと、信仰は其實驗を宣べて曰く萬物悉く可なりと、**神其造り給へるすべての物を視給ひけるに甚だ善かりき**と、宇宙と人生の事物にして何れか善且つ可ならざらんや。　創世記一章三十一節。（四一、一〇）

地上の樂園　密林滿山を蔽ひ、夕陽其頂を照らす、浮雲中腹を纏ひ、靜湖其麓を洗ふ、兩友扁舟に掉し、湖上山に對して進めば、暮雲四境を鎖して、黑暗全景を裹めり、感謝す、地上亦此樂園あるを、天上のそれを豫想せしむ。　日光山中の秋色。（四一、一〇）

秋酣なり　コスモス開き、茶梅咲き、木犀匂ひ、菊花薫る、燈前夜靜かにして筆勢急なり、知る天啓豐かにして秋酣なるを。（四一、一一）

春を迎ふ　人生の貴きは之に春あるが故なり、多く春を樂みし者、之を長壽と言ひ、少なく春を味ひし者、之れを短命と稱す、春は生命なり、又復活なり、春は天國の降臨なり、「爾國を臨らせ給へ」然り、春を臨らせ給へ、而して裕かに春の恩惠に浴して其眞意を覺らしめ給へ。（四二、三）

春風到る　寒冬去て春風到れり、富者は歡び、貧者も亦喜ぶ、神の恩惠はすべて斯の如し、萬人に及んで人を擇まず、而かも貧者の之を感ずること富者よりも大なり、吹けよ春風、吹けよ聖靈、而して萬人の心を融和して天恩の豐けきを感謝せしめよ。（四二、四）

エデンの園　遠き太古の事に非ず、新綠五月の春の野なり、天地は新たに造られて榮光全地に滿つ、神の靈梢を拂ひ、翼を有てる者水濱に降る、綠蔭涼しき所に神の聲聞こゆ、聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、萬軍のエホバと、セラピム、セラピムは飛翔けりつゝ歌ふ、誰か言ふ、地は既に詛はれたりと、新綠山野を被ふ時に余輩は其決して爾あらざるを識る。

創世記二、三章。以賽亞書六章。（四二、五）

天然の愛　天然を愛すべし、然れども天然にあこがるべからず、天然を愛して神と義務とを忘るべからず、天然をして事ふる靈たらしむべし、彼をして誘ふ友たらしむべからず、天然は之を猶太人の如くに觀

ずべし、希臘人の如くに之を愛すべからず、天然は之を神に達するの足發とすべし、神を祭るの聖殿となすべからず、恐くは彼れアシタロテの如くなりて偶像崇拜の罪に我等を導かん。　列王紀略上十一章三十三節

參考。（四二、五）

杜鵑花（さつき）　春老ひ花失せて庭園空し、時に杜鵑花の濃綠を破て開くあり、櫻花の如く高く聳えず、躑躅の如く赤く燃えず、地上低く葉に隱れて咲く、謙遜なる杜鵑花よ、我は汝を愛す、汝は衆芳と色を競はず獨り百花に後れて開く、願ふ我も亦汝に傲ひ、低くして晩く開き、以て世の晩春の憂を慰めんことを。（四二、六）

庭園の奇蹟　過去の奇蹟は之を敎會に讓れよ、余輩に目前の奇蹟あるあり、ガリラヤ湖畔に於てにあらず、余輩の狹き庭園に於て大なる奇蹟は行はれつつあり、黑き穢れし土よりして野百合は白き面帕を織り、ダアリヤは赤き衣裳を紡ぐ、金絲桃に黃金輝き、瞿麥に紅白亂る、神は

余輩の庭園に在し給ふ、余輩は教職を要せず、花間を逍徉して直に神に教えらる。（四二、七）

雑草 酢漿草は酸氣強し、蕺菜は臭氣甚し、車前は葉面廣し、蓴菜は根帶深し、雑草庭園に蔓延り生長甚だ速かなり、心園又斯くの如し、罪の目錄に加へて雑草のそれを想出さしむ。（四二、七）

光明の宇宙 穹蒼に輝く無數の恒星はすべて悉く太陽なり、而して吾人の太陽も亦恒星の一たるに過ず、而して其の光明は二十八億哩外の海王星を照らし、尚ほ遙かに其以外に達す、依て知る吾人の棲息する此地球の光明の海に漂ふ者なることを、其夜と稱する者は自身其面を太陽より反くる時に自から作る己が影たるに過ず、環外一歩を出れば洋々たる光明の宇宙の際限なきを見る、斯かる宇宙に幽暗の陰府の存する理なし、人は自から求めて暗黒を作るを得べし、然れども神も宇宙も彼を收容するために特別の暗處を備へざるなり。（四二、九）

宇宙生命充實說 瑞典國の學者スヴァンテ・アルレニウス氏宇宙生命充實說を唱へて學界の歡迎する所となる、其說く所に循へば一英寸の六百二十九萬七千六百分の一以下の生的細胞全宇宙に充滿し、光線の推す所となりて球體間を往來し、其熟して生命を受くるに足る者あるに遇へば之に降て生物を發生すと、是れ實にパウロの所謂

夫れ我等は彼(神)に在りて生き又動き又存ることを得るなり

との眞理を科學の方面より唱へし說ならずや、生命は僅かに地上に存し、虛空は無涯の墓地なりとの說は今や學者の破棄する所となれり、生命は宇宙に充滿す、死は不可能なり、生命不滅說は今や科學的に證明されんとす、喜ぶべきにあらずや。（使徒行傳十七章二十八節。（四二、九）

秋郊の福音 死者の復活のみ大能の證明に非ず、五穀の豐熟も亦異能の休徵なり、パルナバとパウロ、ルカオニヤの人に告げて曰く

神は汝等を惠みて天より雨を降らせ、豐穰なる時期を與へ、糧食と喜

樂を以て汝等の心を滿たしめ、以て己れ自から證し給へり

と、今や金波稻田に靡き、玉粒香穗に低る、何ぞ福音に秋郊に接して罪を悔て父に歸らざる。使徒行傳十四章十七節。（四二、一〇）

所感十年 終

『所感十年』奥附

實價金壹圓

大正二年二月一日印刷
大正二年二月五日發行

著者 東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地 內村鑑三

發行兼印刷人 東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木百拾參番地 山岸壬五

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀英舍第一工場

發行所 東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地 聖書研究社

不許複製

325
176

終